

# 水 × SDGs

Japan-YWP「水×SDGs」ワーキンググループ報告書

～SDGsの日本ごと化・水ごと化・自分ごと化～

平野実晴（編集責任）  
後藤正太郎、鈴木真実、長尾麻未  
矢口光良、吉田健人、高田一輝、久富稔

人口減少、自然災害、私たちが生きる未来はもう分かってる。だからこそ今、誰一人取り残さないために、私たちにはできることがある。上下水道から世界を変えるプロジェクト、「水×SDGs」!

## SDGsとは？

持続可能な発展目標（SDGs：Sustainable Development Goals）は、私たちが目指す未来像として、非常に野心的かつ変革的なビジョンを設定したものです。人間と地球そして繁栄のための行動計画として国際連合が採択した『我々の世界を変革する：持続可能な発展のための2030アジェンダ』という決議の中に定められています。17の目標と、169のターゲットから成り立っており、そのうち多くが上下水道にも関わります。

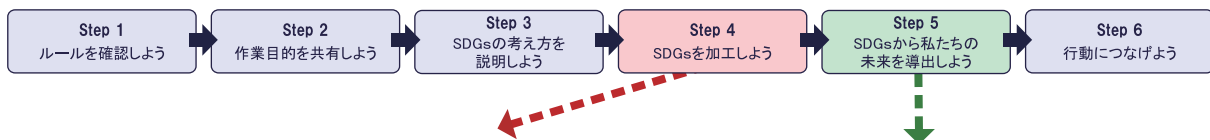
## 「水×SDGs」とは？

水に関心を持つ若手のプラットフォーム、Japan-YWPの有志で取り組んだプロジェクトです。はじめはSDGsについて勉強会を開催していましたが、徐々に「日本の上下水道システムの文脈に即した具体的な使い方を掘り下げる必要があるのではないか」という問題意識が共有されました。そこで、ワーキンググループを立ち上げ、議論を重ねることで編み出したのが、『「水×SDGs」メソッド』です。

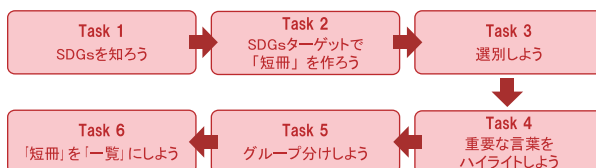
## 「水×SDGs」メソッド

国連で定められたままでは扱いづらいSDGsを、日本の上下水道の文脈で「使えるようにする」ための方法を3つの階層で紹介しています。ここで提案する手順を通して、SDGsを知り、加工することによって、「このような上下水道にしたい」という未来像を描くためにSDGsを活用しやすくなります。

### A. SDGsと向き合う手順



### B. ターゲットの見極め ～短冊を用いた見える化～



### C. ワークショップを運営する ～ジグソー法の活用例～



日本ごと化  
水ごと化  
自分ごと化

## Japan-YWP

Japan National Young Water Professionals (Japan-YWP) は、日本水環境学会、日本水道協会等と密接な連携をとりながら、上下水道・水環境に関連する分野の学術的研究・知識の普及・水環境保全への積極的な貢献を目的とした若手中心の組織です。教育・研究機関、官公庁・自治体、民間企業に所属する水関連の若手が広く集まることで、分野・職種間の交流を促進し、水問題に関する様々な情報交換を行うプラットフォームを構築しています。また、他国のYWPとも交流を行うことで、若手の国際ネットワークを広げています。

# 「Japan-YWPとSDGs」について

Japan-YWP第5期代表 浅田 安廣

Japan-YWPは、2010年3月5日に設立したInternational Water Association (IWA) 日本国内委員会 (IWAの日本支部) の下部組織であり、私個人としては水に関わる様々な若手を繋ぐ大切な組織であると考えています。その代表として何かを成し遂げられないか、第5期 (2018-2019年度) が始まる前にそう考えたときに、着目したのが持続可能な開発目標 (SDGs) でした。そのきっかけは、「水×SDGs」ワーキンググループ責任者である立命館アジア太平洋大学平野実晴助教 (当時、京都大学博士学生) との出会いとその後の継続して行った対話でした。最初はお互いの理解が薄く、会話が成り立っているようで成り立っていませんでしたが、回数を重ねるごとにお互い成長し、その中で私がYWPで成し遂げたいことと彼がYWPで成し遂げたいことが一致し、Japan-YWPの活動にSDGsを主体とした活動を組み込むことができました。これが、Japan-YWPで行った最初の大きな長期プロジェクト「水×SDGs」の始動となります。

その後、SDGs勉強会、ワークショップ、IWA世界会議のJapan-YWPセッション「Post SDGs Future Vision Call」の経験を経て、多くの人々と繋がりができ、ついに2019年初めに「水×SDGs」ワーキンググループが設立しました。その間、スムーズにことが進んだ訳ではなく、何かと進め方などで意見がぶつかり合ったりと厳しい状況が続いた中で、築き上げられました。

本書の内容は、2年間というJapan-YWPの長期プロジェクトの中で試行錯誤しながら築き上げた成果が簡潔に分かりやすくまとめられています。読者の皆様は、若手からの提案という視点だけではなく、「SDGs」に向けた新たな取り組みに対する成果物という視点も含めて、本書を読んでいただけますと幸いです。本書が、今後の「SDGs」の達成や皆様の活動に少しでも役立つことを期待しています。



第1回勉強会にて

## 目次

「Japan-YWPとSDGs」について .....	3
はじめに .....	5
1.なぜ今、「水×SDGs」か? .....	6
2.SDGsを上下水道の未来像を描く道具に—「水×SDGs」メソッド構築の背景 ..	11
A. SDGsによる対話の枠づけ .....	11
B. SDGsを落とし込む：日本に、水業界に、自分の行動に .....	12
C. 道具立て .....	13
3. 「水×SDGs」メソッドの紹介 .....	14
A. SDGsと向き合う手順 .....	15
Step 1：ルールを確認しよう .....	15
Step 2：作業目的を共有しよう .....	15
Step 3：SDGsの考え方を説明しよう .....	15
Step 4：SDGsを加工しよう .....	16
Step 5：SDGsから私たちの未来像を導出しよう .....	16
Step 6：行動につなげよう .....	16
B. ターゲットの見極め～短冊を用いた見える化～ .....	17
Task 1：SDGsを知ろう .....	17
Task 2：SDGターゲットで「短冊」を作ろう .....	17
Task 3：SDGターゲットを選別しよう .....	18
Task 4：重要な言葉をハイライトしよう .....	18
Task 5：グループ分けしよう .....	19
Task 6：「短冊」をまとめて「一覧」にしよう .....	20
C. ワークショップを運営する～ジグソー法の活用例～ .....	21
おわりに .....	23
巻末資料 .....	24
1. 活動の流れ .....	24
2. 活動の成果 .....	29
成果①「水×SDGs」ターゲット一覧 .....	29
成果②「水×SDGs」ワークショップ .....	32
成果③ 日本の上下水道の未来像 .....	35
編集後記 .....	36

## はじめに

“SDGs”というアルファベットが目につくようになりました。政府も掲げていますし、メディアに映る企業の役員はSDGsバッジを胸につけています。私たちの暮らしの近くで行われる地域の活動とのつながりも、意識されるようになってきました。

2018年度、Japan National Young Water Professionals (Japan-YWP) では水業界、特に上下水道セクターでSDGsがどのように関わるのか、「水×SDGs」をテーマに掲げ、勉強会を複数回にわたって開催しました。例えば、途上国への開発援助について情報提供や意見交換を活発に行いました。そうした中、参加者からは、「国際的レベルのSDGsを学ぶだけでなく、日本の上下水道システムの文脈に即した具体的な使い方を掘り下げる必要があるのではないか」、といった意見が出されるようになりました。そこで、2019年初めにJapan-YWP「水×SDGs」ワーキンググループを立ち上げ、継続的に議論を行うことになったのです。Japan-YWPでは、初となるパイロット的な取り組みでした。

Japan-YWPでは、様々な取り組みを通して、先人の叡智を継承しつつ、他方で新しい時代を見据えることで水の未来をつないでいこうとしています。「水×SDGs」のイニシアティブも、“SDGs”という言葉を超え、日本における水のあり方を議論し、課題を見つめなおし、新たな考え方を探る場になりました。こうした活動は、まさにSDGsの次のような理念を体現しているのではないのでしょうか。

「人類と地球の未来は、私たちの手の中にあります。そして、今日の若い世代が握りたいものは、将来の世代に渡されていきます。私たちは持続可能な発展への道を描きました。その旅路が成功し、その到達点から後戻りしないことを確かなものにするかどうかは、私たちによって決まるのです。」<sup>1</sup>

Japan-YWP「水×SDGs」ワーキンググループでの議論は、より多くの人々と一緒に道なき道を見つけ出し、水システムの将来像を開拓していく中で、「SDGsは使えるもの」であることを強く信じさせることにつながりました。

この報告書は、私たちが議論を重ねた過程を振り返ることで、どういった作業がポイントになったかをまとめたものです。「ワーキンググループの成果として、SDGsを活用する前段階として道具立てする方法を『「水×SDGs」メソッド』として提案しています。ここで示しているのは、あくまでSDGsを日本国内で用いるための準備の手順です。例えば、それぞれの地域や組織などでビジョンや戦略などを考案する際に、参考にしていただけないか考えています。

本報告書の本文では、**1. なぜ今、「水×SDGs」か？**で、どういった意図のもとでJapan-YWPでのSDGsに関する勉強会やワーキンググループの活動を行うことになったのか、SDGsの解説も交えながら背景を説明しています。こうした取り組みを通して得られた発想、SDGsを使えるようにする方法を、**2. 上下水道の未来像を描く道具に—「水×SDGs」メソッド構築の背景**で提案しています。その具体的内容は、**3. 「水×SDGs」メソッドの紹介**の中で、実践に向けた手順を示しながら紹介しています。最後に、**おわりに**で、今回の活動では取り組むことのできなかった課題をまとめています。具体的な活動成果を掲載している**巻末資料**も、合わせてご参照ください。

<sup>1</sup> 国連, 2015. 持続可能な開発のための2030アジェンダ. 国連総会決議70/1. 53項. 英語本文と仮訳は外務省ホームページから入手可能 [https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/sdgs/about/index.html#about\\_sdgs](https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/sdgs/about/index.html#about_sdgs) (2021年3月1日最終アクセス) (本報告書では、外務省仮訳に一部変更を加えています)

# 1. なぜ今、「水×SDGs」か？

本節では、「水×SDGs」をテーマとした勉強会で扱った内容や、ワーキンググループ設置の背景にあったSDGsに対する理解ないし認識をまとめています。

時代が変わり、改めて上下水道の将来像を描きなおす重要性が指摘されてきました。国や自治体レベルでの「ビジョン」の改訂や企業の長期戦略などに、新たな未来像が示されるようになっていきます。Japan-YWPでは若手が自主的に集まり、立場を超えて、共に日本の課題を念頭に置きながら未来を描く活動を行ってきました。

言うは易く行は難し。日本の上下水道の未来像を描こうとしても、一から考えると身構えてしまいます。単に流行に乗っただけでは実効性に欠ける将来像になってしまうかもしれません。長年の活用耐える重みのある未来像を作り上げるには、様々な方面から参加者・協力者を募り、じっくり議論すべきであると考えられます。

だからといって、それぞれの立場や利害を束ねていくだけで、共有の未来像へと止揚させることができなければ、結局は各々に「がんばる」ことを求めるだけの精神論になりかねません。その結果、疲弊するだけであれば行動する動機づけを失ってしまいます。

こうした尻込みしたくなる理由をあげていけば、枚挙にいとまがありません。まず、一步を踏み出したい。そうした時に、SDGsは頼りになります。その理由は、単に「『国連が定めた目標だから』『政府がSDGsを推進しているから』といった消極的なものではない」はずだ、このようにSDGsに詳しい高木超氏は指摘しています<sup>2</sup>。なぜ自治体がSDGsに取り組むのか、という問いへの回答を引用します。

「SDGsを活用することで、これまで自治体が抱えていた課題を顕在化させ、その解決に向けて、時流を捉えた新たな視座を与えてくれることが挙げられる。残念ながら、SDGsは何でも叶えてくれる「魔法の杖」ではないし、その達成を政策の中で掲げさえすれば既存の課題解決が一挙に進むというものでもない。しかし、SDGsを活用することによって「このような自治体にしたい」という未来の自治体像を描くためのヒントや、鍵となる示唆を得ることができる。」

こうした指摘を踏まえると、私たちが「このような上下水道にしたい」という未来像を描いていく上でも、SDGsは参考になりそうです。この「SDGs」、一体どのようなものなのでしょう？

## SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS



<sup>2</sup> 高木超, 2020. SDGs×自治体 実践ガイドブックー現場で活かせる知識と手法. 学芸出版社. 24頁.

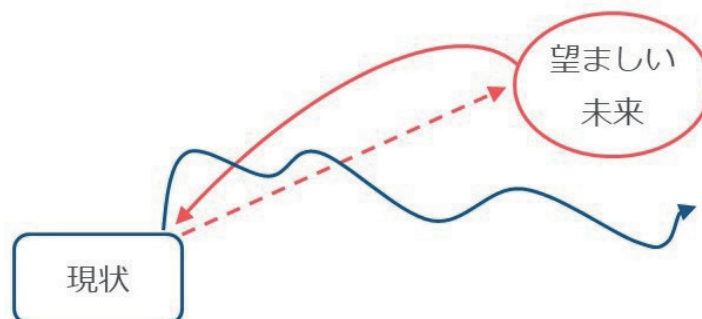
## エス・ディー・ジーズとは何か？

2015年、設立70周年を祝う国連は、人間と地球、そして繁栄のための行動計画を示した決議『我々の世界を変革する：持続可能な発展のための2030アジェンダ』を採択しました<sup>3</sup>。この中で定められた持続可能な発展（開発）目標（SDGs：Sustainable Development Goals）は、私たちが目指す未来像として、非常に野心的かつ変革的なビジョンを設定したものです<sup>4</sup>。

SDGsは、どのような点で革新的で、なぜ世界中から参照されるほど大きな影響力を持っているのでしょうか。特に重要と考えられる理由を二つ、確認します<sup>5</sup>。

一つ目は、『2030アジェンダ』が各国のリーダーが政治的に合意した、人類と地球にとって極めて重要な分野で向こう15年間にわたり行動を促すための計画であるということです。確かに、形式的に見れば、『2030アジェンダ』は、条約のように法的拘束力を持つ文書ではありません。とはいえ、国連の全193加盟国が総会で合意し、加盟国に行動をとるよう勧告する決議であるという重みがあります。深刻な貧困や格差が個々人の努力によって克服できる程度のもではなく、自然環境に与える負荷は地球の再生能力を超えています。このように、現代社会はもはや持続可能ではなく、諸課題が重大で切迫しているという現状認識のもと、世界的な行動を喚起する強い政治的メッセージを持ったSDGsが策定されました。私たちが宇宙船地球号で共生する限り、SDGsの達成に向けた行動をとることは、一人ひとりが負う道義的責任であると言えます。

二つ目に、SDGsの策定過程が参加型で行われたことで、オーナーシップが共有されていることが指摘されています。SDGsの前身で、2000-2015を期間としていたミレニアム開発目標（MDGs）は、主に開発途上国に対する目標でした。一部の専門家や国際機関職員によって定められたこともあり、上からの押し付けの印象が否めなかったという経緯があります。それに対し、『2030アジェンダ』の交渉は、開かれた合意形成となりました。各国政府が作業部会に分かれて交渉を重ねたことに加え、企業や市民社会代表など、様々な利害関係者（ステークホルダー）を含めた意見収集が世界各地で実施されました。実際に、2年以上にわたるコンサルテーションは、専門家やNGO、企業を含む多くの利害関係者からのインプットがありました。このことも踏まえ、『2030アジェンダ』は、諸国の代表が「私たちの国民に代わって行った歴史的な決定」であると宣言しています。



SDGsは、世界全体で目指していく17の「目標（ゴール）」と、具体的な到達目標を定めた169のターゲットから成り立っています。これらを定めた背後には、現状の延長線上に将来を考える（フォワードキャスト）のではなく、どういった未来を望むかを定義し、そこから必要な行動を導こうとする発想があります（バックキャスト）（上図）。各ターゲット達成に向けた進捗の度合い

<sup>3</sup> 国連, 2015. 前掲.

<sup>4</sup> 国連, 2015. 前掲, 7項.

<sup>5</sup> 蟹江憲史, 2017. 持続可能な開発のための2030アジェンダとは何か—SDGsの概要と背景. 蟹江憲史 編. 持続可能な開発目標とは何か. ミネルヴァ書房, 1-20頁.

は、国連で設定される指標によって測られる構造になっていますが、どのような行動をとるかについて、具体的な定めはありません。国家レベルの政策をはじめ、地域レベルの政策、あるいは国内の地方や自治体レベルの政策、そして、企業、NGOや組合、学界や国際機関といった様々な利害関係者（ステークホルダー）が、呼びかけに自発的に応え、行動につなげていくことを期待する新たなアプローチで、「目標設定によるガバナンス」ないし「目標ベースのガバナンス」と呼ばれています<sup>6</sup>。

今、私たちは、SDGsの実現に向けて行動を起こしている段階です。SDGsは国際的な合意ですので、第一義的には各国政府が、自国の置かれた状況を念頭に、具体的な国家計画プロセスや政策、戦略に反映していくことを求められます。同時に、地方公共団体や民間セクター、市民社会といった様々な行動主体の役割も大変重要で、連帯の精神に基づくパートナーシップを通じた実施が必要不可欠であるとの認識も示されました<sup>7</sup>。日本でも、国レベル、自治体レベル、そして企業によるSDGsの実施を推進する制度化や取り組み例が多層的に見られます<sup>8</sup>。

時にSDGsは、いわば上から与えられた目標で、制度化された実施の枠組みに限るのだと思われがちですが、そうではありません。むしろ、ボトムアップで実施されていくことへの期待が高いと言えます。まさにこの点を反映し、『2030アジェンダ』は次のように謳っています。

「私たちの旅路は、政府だけでなく、国会、国連システムや他の国際機関、地方政府、先住民、市民社会、ビジネス・民間セクター、科学者・学界、そしてすべての人々を巻き込んでいくものです。既に何百万もの人々がこのアジェンダに関り、自分ごととしています。これは、人々の、人々による、人々のためのアジェンダであり、そのことこそが、このアジェンダを成功に導くと確信しています。」<sup>9</sup>

もっとも、このことは個々人が自由にSDGsを実施していけばよいのだということでもありません。

### SDGs活用の注意点—「SDGsウォッシュ」を避けるために

日本の国内でSDGsの認知度が徐々に高まっていることは<sup>10</sup>、勇気づけられる現状です。しかし、中には抽象的すぎる議論が少なくないというのも実際です。確かに、SDGsのロゴやアイコンはカラフルで、デザイン性も高いため、既存の政策と紐づけることで魅力的に見えて満足してしまいそうです。ただし、“SDGs”に言及しつつ行われる活動であっても、その理念を具現化できなければ、目標達成には結びつきません。それどころか、それに反する効果を生じさせる危険も伴います。このように、



<sup>6</sup> 蟹江憲史, 2017. 21世紀の新グローバル・ガバナンス戦略—目標設定によるガバナンスとSDGs. 蟹江憲史 編. 持続可能な開発目標とは何か. ミネルヴァ書房. 178-195頁; 蟹江憲史, 2020. SDGs. 中央公論新社. 12頁.

<sup>7</sup> 国連, 2015. 前掲. 41, 45, 56項.

<sup>8</sup> 小野田真二, 2019. 持続可能な開発目標 (SDGs) と実施のためのマルチレベル・ガバナンス. サステナビリティ研究9, 99-117頁.

<sup>9</sup> 国連, 2015. 前掲. 52項.

<sup>10</sup> 企業広報戦略研究所, 2019. ESG/SDGsに関する意識調査.

<https://www.dentsu-pr.co.jp/csi/csi-outline/20191024.html> (2021年3月1日最終アクセス) ; IGES & GCNJ,

2020. ESG時代におけるSDGsとビジネス ~日本における企業・団体の取り組み現場から~.

<https://www.iges.or.jp/jp/pub/sdgs-and-business-esg-jp/ja> (2021年3月1日最終アクセス) .



上辺だけでSDGsが語られる状況を「SDGsウォッシュ」と呼び、警鐘が鳴らされています。そもそも水業界では、WASHは、Water, Sanitation and Hygieneを表す頭字語として使っていますので、この言い回しが広まること自体も気がかりです。

こうした状況が生じる背景にあると考えられる、SDGsについての誤った認識を二つ、確認します。

まず、日本の上下水道は既に住民に行き届いているので、SDGsは関係ないのでは？こうした声の背後には、途上国に日本の先進的な知見を提供する援助こそが、SDGsの旗のもとで行うべき活動だという理解があると考えられます。実際に、MDGsでは、発展途上国が主な対象でした。しかしながら、SDGsはグローバルな、普遍的な目標として、先進国も対象にしたところに特徴があり、日本で取り組まれることも期待されています<sup>11</sup>。

ここで注意を向けたいのが、“D”（development）です。他動詞の意味で「開発」と訳されることが多く、日本が途上国に対して支援する印象を与えてしまいがちな単語です。気を付けたいのが、自動詞の名詞化として自発的な向上というニュアンスも含まれていることです。そこで、SDGsを持続的な「発展」目標ととらえると、日本にとっても関連することを感じやすくなるのではないのでしょうか。

次に、上下水道事業体だから、水業界でビジネスをする企業だから、といった理由で、水と衛生に関する目標6への貢献を掲げるだけでは不十分だという点です。目標6に焦点を合わせるこの見方の問題は、SDGsが克服しようとしている縦割りの行動（「タコつぼ化」「サイロ化」とも言われる）をむしろ後押ししかねないところにあります<sup>12</sup>。『2030アジェンダ』で示されている「持続可能な発展」の概念は、社会・環境・経済の三側面の間でバランスを図るというものではもはやなく、諸課題がつながっており、相互依存的であるがゆえに、包括的に対処するアプローチを意味するようになっています<sup>13</sup>。そのため、SDGsを構成する17の多様な目標には相互関連性（インターリンクエッジ）があることを意識することが重要です。すべてのSDGsとターゲットは、一体のもので、それぞれに分割できる性格のものではないのです<sup>14</sup>。

相互関連性を意識すると、水分野への貢献の先が見えてきます。目標6への達成は、別の目標を促進させることもあります。逆に負の影響を与えることもありますので、後者の場合は注意が必要です<sup>15</sup>。汚水を処理する業務を行いながら、その作業で使っている物品が実はその生産過程で現地の水環境を汚染しているようなものであるならば、矛盾があります。統合的視点から見れば、水に関する目標に貢献しているから、自らの組織内で労働環境やジェンダー平等、エネルギー利用、廃棄物管理などを考えなくてよい、ということにはなりません。

---

<sup>11</sup> 国連, 2015. 前掲. 55項.

<sup>12</sup> 三浦宏子, 下ヶ橋雅樹, 富田奈穂子, 2017. 持続可能な開発目標（SDGs）における指標とモニタリング枠組み. 保健医療科学66(4), 358-366頁.

<sup>13</sup> 国連, 2015. 前掲. 13項.

<sup>14</sup> 国連, 2015. 前掲. 55項.

<sup>15</sup> UN-Water, 2016. Water and Sanitation Interlinkages across the 2030 Agenda for Sustainable Development . <https://www.unwater.org/publications/water-sanitation-interlinkages-across-2030-agenda-sustainable-development/> (2021年3月1日最終アクセス) .

## 若手専門家からの提案に向けて

広報活動のおかげでSDGsが広まりつつある今、その実施に直接的であれ間接的であれ関わっている私たちには、その本質に立ち戻り、その理念を実現しようとする姿勢が改めて求められています。

そこでJapan-YWPでは、水とSDGsとの結びつきを考えていくために、「水×SDGs」をテーマに掲げ、一連の勉強会やワークショップを開催しました。そこでは、例えば次のような問いが議論されました。日本国内で、本当に、SDGsに書かれている内容は自明で、既に達成されていて、そして明日も、2030年も、2050年になっても、達成され続けた状態が確保できるのか？日本の上下水道は、持続的でレジリエントであり続けるために、どのような「発展」を遂げていくべきなのか？こうした問いを考えながら日本の、上下水道の、そして私たちの未来像を描こうとする中で、SDGsは様々なヒントを提供してくれることが分かりました。

SDGsを活用するという事は、単にSDGsを自らの活動と結び付けることではない、という考えが参加者の間で共有されたと感じます。SDGsの活用とは、私たちが活動する文脈において、SDGsの理念や行動計画を構成する目標体系と照らし合わせながら、問題を探り、目標を定め、課題解決に向けた協働を図ることであると言えるのではないのでしょうか。しかし、SDGsを活用した行動に至る以前に、SDGsを用いて問題を探り、目標を定める段階で、困難に直面しました。

SDGsの中で、何が比較の軸となる本質的部分であり、何が文脈に即してカスタマイズ可能な要素なのか、特定しなければならないためです。この段階を経なければ、ある活動がSDGsの理念を体現し、その達成を狙ったものであるのか、説得力をもって説明できません。

私たちJapan-YWPの有志は、できるだけ丁寧にSDGsと向き合うことを試みました。一年に及ぶワーキンググループの取り組みにおける試行錯誤を振り返ったところ、SDGsを扱いやすくする加工の必要性と、そのための適切な手順化の重要性が見えてきました。言い換えれば、SDGsを活用する前に、使えるようにするための、道具立ての段階があるのです。



第1回勉強会にて

## 2. SDGsを上下水道の未来像を描く道具に— 「水×SDGs」メソッド構築の背景

前節では、私たちが「このような上下水道にしたい」という未来像を描いていく上で、SDGsは参考になりそうだということ述べてきました。そこで、早速SDGsを実際に読んでみると、再び立ち止まってしまいそうになります。実は、国際文書で示されたSDGsは、日本の国内で生活する私たちにとって、そのままでは行動指針にしづらいのです。

SDGsがそのままでは扱いづらい理由は、世界共通の行動計画として作られているため内容が総花的であることや、日本の文脈に即して書かれていないことがあげられます。そのため、上下水道の現場にプロ意識をもってかかわるほど、17の目標に目を通して綺麗に飾られた言葉にしか見えず、具体的な指針を提供してくれないと感じてしまうかもしれません。また、17の目標の具体化である169のターゲットを見ていくと、今度は数が多く、しかも直接には関係のないものが多くあり、読み通すだけでも大変です。しかも、国連用語が多用されていて分かりにくいですし、途上国を念頭に置いた書きぶりになっているターゲットも少なくありません。

実は「SDGsを使う」前に、「使えるようにする」ことが、必要なのです。料理に例えれば、SDGsは生のままではあくが強すぎるのです。しかし、SDGsの理念には「うまみ」がたっぷり含まれています。SDGsから引き出される味は、国や自治体、企業、NGOなど各々が得意とする料理を引き立て、政策のコースメニューに一体性を出してくれます。そのためにも、SDGsの下ごしらえが欠かせません。

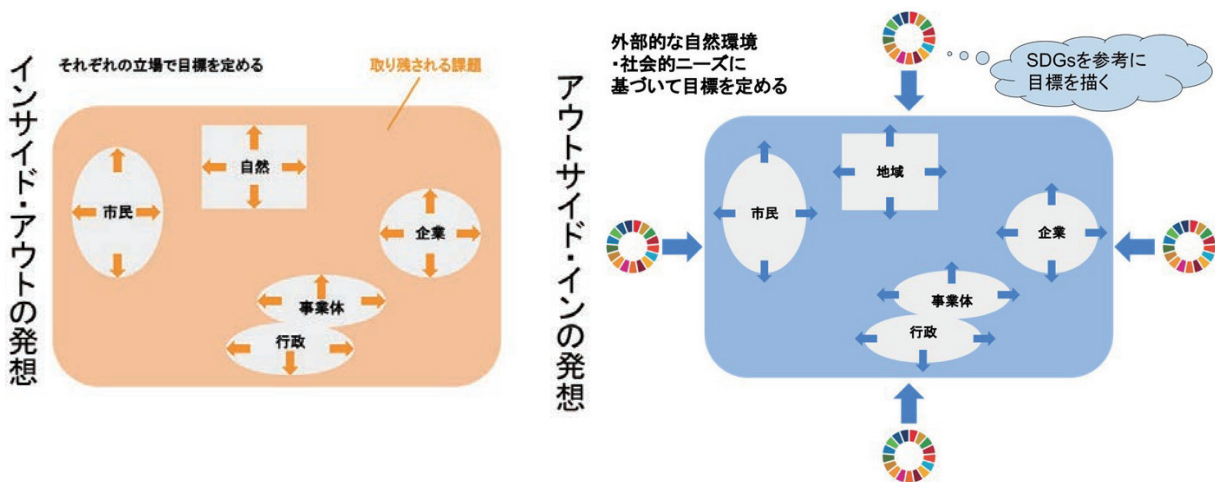
### A. SDGsによる対話の枠づけ

私たちは、公務員やビジネスパーソン、研究者、利用者といった個別の立場や利害関係のもとで行動しています。また、技術、経営、広報といった異なる専門を持っています。こうした立場・知識の内側から活動目標を考えると、専門や関心の外にある重要な課題が見過ごされ、そのまま残されてしまうかもしれません。それに対し、すべての立場で共有される外側の視点から私たちの目標を設定することができれば、共通の課題に協働して対応していくことができます（アウトサイド・イン・アプローチ）<sup>16</sup>。

アウトサイド・イン・アプローチで課題を発見しようとする場合、自分の外部に視点を設定することができれば、自らの置かれた状況を捉えなおせるようになるはずです。ただし、その視点は、社会に共有された価値に拠って立っていること、そして問題を顕在化させられる鋭さを備えている必要があります。SDGsは、その役目を果たすことができます。

SDGターゲットを参照し、議論を始める枠とすることで、日本の上下水道にとって足りないことや見落としていたことを、共同作業を通じて発見していくことができるのではないのでしょうか。言い換えれば、SDGsを取り入れることはそれ自体目標ではなく、あくまで上下水道の未来像を考えるための道具です。ただし、それは容易に他のもので代用できない特徴を備えています。

<sup>16</sup> GRI, 国連グローバル・コンパクト, WBCSD (グローバル・コンパクト・ネットワーク・ジャパン & 地球環境戦略研究機関 訳), 2016. SDG Compass: SDGsの企業行動指針—SDGsを企業はどう活用するか—. 18-19頁. <http://ungcjin.org/sdgs/> (2021年3月1日最終アクセス).



SDGsのうまみを引き出すためには、美味しいところだけをもぎ取るのではなく、SDGs全体を見渡して、私たちの議論を組み立てていくが必要になるのです。実際SDGsには、上下水道セクターが直接達成に貢献している目標もあれば、間接的に支えている目標もあるでしょう。一方で、これまでの行動を維持することで、気づかないうちに達成を遅らせてしまっている目標があるかもしれません。さらに、より細かい文言とも向き合い、そこに含まれる重要な概念やアイデアを読み解き、抽出しなければなりません。こうした作業を行うことでこそ、単にSDGsに言及するだけの「SDGsウォッシュ」を避け、建設的な協働を生み出す共通言語としてSDGsを活用できるようになります。

## B. SDGsを落とし込む：日本に、水業界に、自分の行動に

そのままでは日本の文脈で、上下水道セクターで、自分の行動の指針として使いづらいSDGsは、私たちが未来像を描くときに、どのようなヒントを与えてくれるのでしょうか？

国連で定められたSDGsは、各国の置かれたそれぞれの現状、能力、発展段階、政策や優先課題を踏まえて、各々に合ったアプローチ、ビジョン、モデル、利用可能な手段を選んで実施されることが想定されています<sup>17</sup>。また、実際の行動が実施されるのは各地域です。SDGsの実施に向けて、それぞれの行動主体が目標、ターゲットを自ら選定し、自分ごと化していく作業が求められています<sup>18</sup>。採択から6年が経過した現在、SDGsの「ローカル化」、つまり、自治体のレベルで、それぞれの地域の文脈を考慮しながらSDGsを定義づけ、実施し、進捗管理を行っていく作業が行われるようになっていきます<sup>19</sup>。

Japan-YWP「水×SDGs」ワーキンググループでは、国連で定められたSDGsを日本の上下水道でも参考にするためにはどうすればよいか議論した結果、抽象的な17の目標（ゴール）よりも、より具体的な行動目標となっている169のターゲットを見ていく必要があることで意見がまとまりました。そして、これらターゲットを「使えるようにする」ためには、3段階に分けて「落とし込み」をする必要があるだろうと整理しました。

<sup>17</sup> 国連, 2015. 前掲. 55, 57項.

<sup>18</sup> 吉田哲郎, 森秀行, 2017. 国連目標の実施—国連目標と国別・ステークホルダー別目標をどうつなげるか?. 蟹江憲史 編. 持続可能な開発目標とは何か. 214-229頁.

<sup>19</sup> GTF, UNDP, UN-Habitat, 2016. Roadmap for Localizing the SDGs: Implementation and Monitoring at Sub-regional Level. <https://unhabitat.org/roadmap-for-localizing-the-sdgs-implementation-and-monitoring-at-subnational-level> (2021年3月1日最終アクセス).

### ① 国内平面への落とし込み：「日本ごと化」

自分の地域や組織の優先課題に合わせる前に、はじめに「SDGsの本質は何か？」を問い、確認する必要があります。国際的な目標としてではなく、日本の文脈に引き寄せたとき、SDGsのターゲットには実際に当てはまらないものが出てきます。例えば、途上国の状況を念頭に置いたターゲットがあります。もっとも、中には文面を若干読み替えることで、日本においても示唆を与えてくれるターゲットもありますので、こうしたヒントに着目していくことにも意味があると言えます。

### ② セクターへの落とし込み：「水ごと化」

(広い意味での) 上下水道というシステムでSDGsを考えることは、単に水に関する「目標6」を掲げることでは不十分です。むしろ、すべての目標を見渡し、水とのかかわりで貢献できる側面(例：農業やエネルギーとの連関)、業務の中で配慮していくべき側面(例：ディーセントワークやジェンダーの平等など)など、多角的に捉えていく作業が必要です。

### ③ 行動への落とし込み：「自分ごと化」

政治や組織、他人任せでは、課題の克服ひいては日本の上下水道に良き変革をもたらすことはできません。では、自分個人としてどのような行動を起こしていくことができるのでしょうか。具体的なアクションへとつながるように意識を変えていくことが必要になります。

## C. 道具立て

日本を含め、世界中で、SDGsを各国・各地域で実践に結びつける努力が行われています。その方法に定型があるわけではありませんが、自治体の実践現場で活かす手法<sup>20</sup>や企業がSDGsに即したビジネスを行うための活用術が提案されています<sup>21</sup>。

Japan-YWP「水×SDGs」ワーキンググループでは、①SDGsは、未来像を描く際に、それに向けた議論を枠づける目的で参照すること、そして、②SDGsを用いるためには、身近な文脈に落とし込む、そのために日本ごと化・水(業界)ごと化・自分ごと化させるべきと考えるに至りました。もっとも、この考え方は普遍的でも、実際にどのSDGsを参照するか、どのような身近な文脈(国や地域、セクター)に落とし込むか、画一的な答えはありません。むしろ、SDGsを実践に活かそうとする組織や集団で試行錯誤を重ねる中で明らかにしていくべきであるとも言えます。

そこで重要になるのが、「SDGsを活かす」ために、「SDGsを使いやすくする」、つまりSDGsを道具立てすることです。注意しなければならないのが、SDGsに恣意的な意見が入らないようにすることです。そのためにも、道具立てする過程で、できるだけ多様な視点を入れる必要があります。

次節以降で、Japan-YWP「水×SDGs」ワーキンググループの経験を踏まえたSDGs活用に向けた道具立ての具体的な方法(「水×SDGs」メソッド)を紹介します。

<sup>20</sup> 高木, 2020. 前掲; OECD, 2020. A Territorial Approach to the Sustainable Development Goals: A Synthesis Report. <https://doi.org/10.1787/e86fa715-en> (2021年3月1日最終アクセス)。

<sup>21</sup> 環境省, 2018. 持続可能な開発目標(SDGs)活用ガイド. <http://www.env.go.jp/policy/sdgs/index.html> (2021年3月1日最終アクセス); GRI, 国連グローバル・コンパクト, WBCSD, 2016. 前掲。

### 3. 「水×SDGs」メソッドの紹介

「水×SDGs」メソッドは、日本の水（特に上下水道）セクターで「SDGsを使えるようにする」ための方法を3つの階層で紹介しています。

#### A. SDGsと向き合う手順

SDGsを知るところから、日本の上下水道セクターで使えるように加工し、行動に結びつけるまでを参加型のプロジェクトとして設計する方法を紹介しています。

#### B. ターゲットの見極め～短冊を用いた見える化～

A.では、169あるSDGターゲットから関連するものを選別、グループ化し直す作業があります。これを実際に行う際、SDGターゲットを印刷して切り取った「短冊」を使い、模造紙上で動かすというアナログな方法を紹介しています。

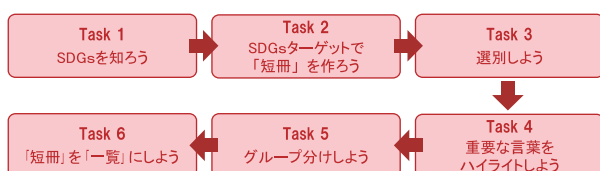
#### C. ワークショップを運営する～ジグソー法の活用例～

SDGsの理解を深め、議論を重ね、発想を積み上げるには労力も時間もかかります。そのため、A.とB.は、一定人数のグループで継続して行うことを念頭に置いています。それに対し、より広く参加者を募ってワークショップを開催することで、A.やB.の作業を外部の目で見直し、SDGsを実際に「使う」ことができます。私たちが「ジグソー」という手法を取り入れて設計したワークショップを紹介します。

#### A. SDGsと向き合う手順



#### B. ターゲットの見極め～短冊を用いた見える化～



#### C. ワークショップを運営する～ジグソー法の活用例～



日本ごと化  
水ごと化  
自分ごと化

ワーキンググループでは、上下水道セクターにとってのSDGsという視点で取り組みました。しかし、「水×SDGs」メソッドは、事業者や企業といった個別の組織の政策目標や戦略を練る目的でも、あるいは水そして他の業界全体でもご活用いただけたらと考えます。その際は、ここで提案するメソッドに、組織規模やニーズに合わせて適宜修正を加えてご活用ください。ワーキンググループの試みから得られた経験も記載していますので、参考にいただければ嬉しい限りです。活動の詳細は、巻末資料に掲載しています。

## A. SDGsと向き合う手順

SDGsを未来像を描く道具として活用しようとする際、参加型の作業ではこういった手順を経ることが必要なのでしょうか？私たちは、ワーキンググループで行った実験的取り組みを振り返り、6つのステップに整理しました。

なお、必ずしも各ステップを1回のワークショップと対応させる必要はありません。ステップ1～3の内容自体も参加型で決定していくことが望ましいですが、目的や時間の制約によって、事前に決定した内容を伝えるだけでも十分な場合もあります。参加者との作業として重要なのはステップ4～6です。参加人数や進め方によっては複数回ずつワークショップを行う必要があると考えられます。

### Step 1: ルールを確認しよう

様々な参加者が、時に個々人の立場や利害にかかわる問題についても議論することになる可能性があります。ありますので、参加のルールを確認します。

#### 「水×SDGs」の取り組み例

「水×SDGs」で参加者に示したルール

- ・自由な発想を大事にする
- ・他人の意見を否定せずに尊重する
- ・自分ごととして考えるよう心がける
- ・ワーキンググループの外で、議論の内容を引用しない（チャタムハウス・ルール）

### Step 2: 作業目的を共有しよう

SDGsを活用することで、日本の上下水道の未来像を描くことが目的であることを共有します。

#### 「水×SDGs」の取り組み例

参加者がはじめから未来像を考えることは難しいので、まずは、現状認識や将来への危機感を共有し、行動をとることの重要性を感じられるように工夫しました。『水の未来予測2030』と名前を付けたワークショップでは、2030年に起こりうる悲観的事態のストーリーをグループで考えました。人権、環境、経済経営の3テーマがストーリーの柱に現れました。

### Step 3: SDGsの考え方を説明しよう

「水×SDGs」メソッドの特徴は、SDGsのターゲットに含まれている言葉の中に、日本の上下水道へのヒントが隠れているという考えに立脚していることです。そのため、国連で定められているSDGsの目標とターゲットを議論の枠として、日本国内の水業界で目指していきたい目標の提案を目指していることを、参加者と共有します。

#### 「水×SDGs」の取り組み例

ワーキンググループでは、ワークショップのはじめに毎回、「水業界に関わる事業者や企業、市民や研究者など、それぞれの立場からビジョンを描くのではなく（インサイド・アウト）、水に関わる利害関係者に共通のビジョンを導出する発想に立つこと（アウトサイド・イン）」を、スライドを用いて説明しました。

## Step 4 : SDGsを加工しよう

SDGsを使う前に、「使えるようにする」ための段階です。SDGsと向き合い、深く理解しつつ、日本の上下水道の文脈に即して使えるように、SDGターゲットに手を加えます。一方ではSDGsに反映された理念や重要な概念を残しつつ、他方で日本の文脈に合うように選り分けたり、言葉を編集したりできます。

また、国連では、17の目標（ゴール）のもとでターゲットが整理されていますが、こうした目標の立て方は、必ずしも日本の上下水道にフィットしているわけではありません。そこで、自分たちの目標を練り上げる基盤とするため、SDGターゲットを独自にグループに分けし直します。

### 「水×SDGs」の取り組み例

この作業に多様な視点が入るように、参加型で進め、複数回にわたってワークショップを重ねることで丁寧に行いました。ワークショップでは、SDGターゲットを印刷して切り取った「短冊」を使い、模造紙上で動かしながら参加者同士で議論しながら作業を進めました。国連が定めた17の目標を見ているだけでは見えてこない、別々の内容を持ったSDGターゲットにも連関があることが発見できました。具体的な方法は、節を改めて紹介しています。

→本節内「B. ターゲットの見極め～短冊を用いた見える化～」を参照

## Step 5 : SDGsから私たちの未来像を導出しよう

「水×SDGs」メソッドのハイライトとも言える段階です。ここでは、SDGsから着想を得つつ、参加者の創造的なアイデアに議論をひらきます。

ワークショップ形式で行う場合、参加者にSDGターゲットを読んでもらい、日本の上下水道システムに関連するキーワードやアイデアを抽出してもらいます。こうして出てきたキーワードやアイデアを投げ所とし、それらを包摂するような表現を考えることで、日本の上下水道の未来像を構想していきます。

### 「水×SDGs」の取り組み例

ワークショップを行うにあたっては、事前に、SDGsの「短冊」をまとめて「一覧」を6枚作成しておきました（巻末資料を参照）。ワークショップ当日、各テーブルに「一覧」を1枚ずつ配布し、テーブルごとに、スローガンを提案してもらいました。

また、継続的にワーキンググループに参加した方だけではなく、より広くの方々からもアイデアを募ることができるよう、単発のイベントで「水×SDGs」メソッドを実践できるワークショップを考案しました。具体的な方法は、節を改めて紹介しています。

→本節内「C. ワークショップを運営する～ジグソー法の活用例～」を参照

## Step 6 : 行動につなげよう

SDGsを絵に描いた餅にしないためにも、所属組織や自分自身の行動につなげていくことが重要です。



## B. ターゲットの見極め～短冊を用いた見える化～

この節では、「SDGsと向き合う手順」のうち「Step 4: SDGsを加工しよう」の具体的な方法を紹介します。

### Task 1: SDGsを知ろう

SDGsには様々な側面の政策目標が含まれていますので、上下水道によって達成される固有のターゲットは必ずしも多くないかもしれません。しかし、上下水道に関わる私たちが達成に貢献できるものは、意外とたくさんあります。そこで、SDGsと向き合うためにも、まずは国連が定めたSDGsに含まれる169のターゲットすべてに目を通します。

#### 「水×SDGs」の取り組み例

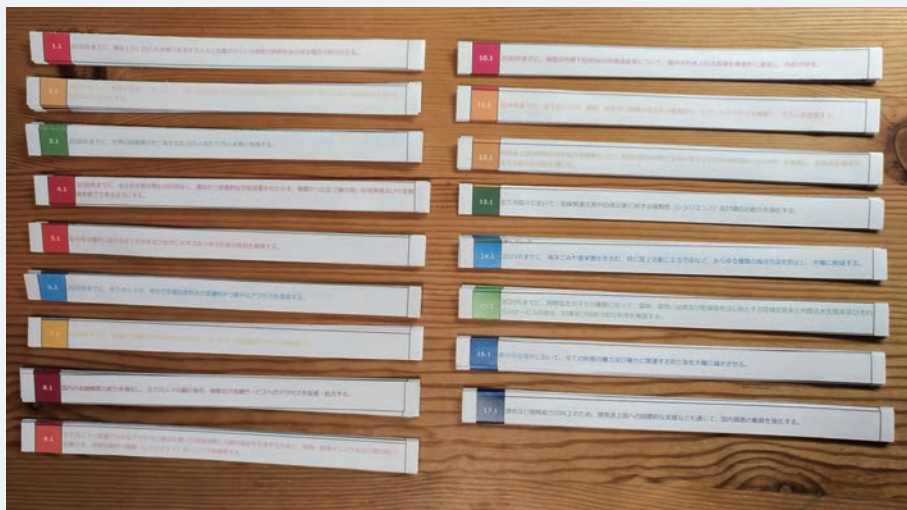
169のターゲットすべてに目を通すこの作業は、地味であり、思いのほか大変です。しかし、後戻りしないためにも、重要な一歩になります。ワークショップでは、ターゲットを読む中で得られた気づきを共有しました。

### Task 2: SDGターゲットで「短冊」を作ろう

ワークショップなどで作業を行うために、カラー印刷したSDGターゲットを短冊のように切り取った紙を準備します。

#### 「水×SDGs」の取り組み例

カラー印刷した169のターゲットを1つずつ裁断機で切り取りました。短冊セットは、ワークショップで使うために、テーブル毎に1セット用意しました。



お手製「SDGターゲット短冊」

### Task 3: SDGターゲットを選別しよう

SDGsに含まれる169のターゲットから、日本の上下水道に関連するものを選別します。逆に、後の作業量を減らすために、上下水道システムに関わる人々・組織には関連しないものは除いてゆきます。ただし、後戻りしないためにも、複数人の視点を入れて、注意深く検討します。

#### 「水×SDGs」の取り組み例

未来像を描くにあたり示唆を与えてくれるSDGターゲットを取りこぼすわけにはいきません。そのために、1回のワークショップではなく複数回かけて169のターゲットすべてを読み込み、それでも関係ないと思うものを除きます。同時に、残すターゲットについても、検討の優先度の高いものと低いものと分けておくといよいでしょう。

効率的に進めるため、オンラインツール（Googleスプレッドシート）を活用し、ワークショップ前に個々人の意見を入力してもらい、当日に集まって意見が異なる部分についてディスカッションしました。また、企画・運営を担っているメンバーで、事前にたたき台も準備しました。

ターゲットを読み始めると、一方では明らかに上下水道と関連するターゲット、他方で上下水道とは全く結びつかないターゲットが出てきます。選別が難しいのは、その中間にあるものです。まずは確実に除外できるものをコンセンサスを得て選んでいきますが、除外することに躊躇するターゲットも出てきます。たくさん残しすぎると後の議論で扱う事柄が多くなり、本質が見えづらくなる懸念があります。一方、除外する場合でも新しい発想や見過ごしがちな視点を取りこぼさないよう注意が必要です。作業の最終段階では、重複する内容を持つターゲットについて、日本の文脈で考える際に、より示唆に富む方を残すようにしました。

最後には、69までターゲットを絞りました。



ワーキンググループの作業の様子

### Task 4: 重要な言葉をハイライトしよう

SDGターゲットの選別と並行して、なぜあるターゲットが重要なのか、なぜそのターゲットは示唆的なのか、考えます。SDGsの原文を残しつつ、重要な概念や着想のヒントとなる言葉が目につくように強調しておき、その理由をメモしておきます。

#### 「水×SDGs」の取り組み例

各ターゲットを読み込みながら、本質的な部分と、逆に読み飛ばしても差し支えない部分に分けていく作業を行いました。

- ・重要な概念や、着想のヒントになる言葉に色を付ける
- ・日本の文脈に合わない言葉を薄くする

3.c	開発途上国、特に後開発途上国及び小島嶼開発途上国において保健財政及び保健人材の採用、能力開発・訓練及び定着を大幅に拡大させる。
11.5	2030年までに、貧困層及び脆弱な立場にある人々の保護に焦点をあてながら、水関連災害などの災害による死者や被災者数を大幅に削減し、世界の国内総生産比で直接的経済損失を大幅に減らす。

加工したSDGターゲット短冊の例

## Task 5: グループ分けしよう

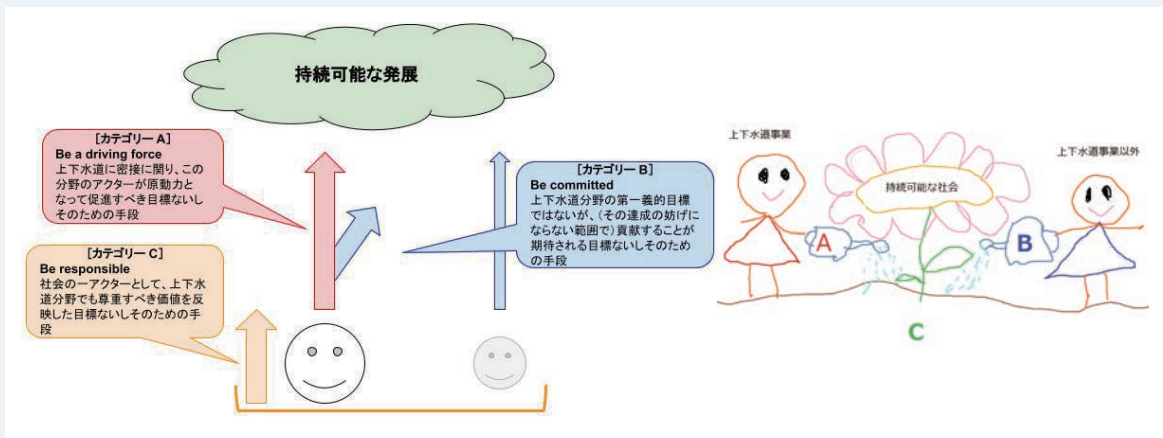
国連では、ターゲットが17の目標のもとで整理されていますが、この目標の立て方は、必ずしも上下水道にとってフィットしているわけではありません。そこで、自分たちの目標を練り上げる基盤とするため、選別したSDGターゲットを一定の観点からグループに分けていきます。

ワークショップでは、SDGターゲットがどのように日本の上下水道と関連するか、その度合いも考慮しつつ、模造紙上に並べるといった作業を参加者に行ってもらいます。重複する内容のものも見つかりますので、関連性の強いものは残し、その他は今後の作業から除きます。

### 「水×SDGs」の取り組み例

はじめの頃に開催したワークショップでは、参加者の自由な発想でSDGsターゲットの短冊を模造紙上で並べながらグルーピングしました。併せて、日本の上下水道に関連するキーワードやアイデアをポストイットに書き、模造紙に貼りました。

選別したターゲットをグルーピングしていくのは創造的な作業なので、事前にどのようなターゲットがあるのか、ある程度知っていないと、手につかないという難しさがあります。そこで、企画・運営メンバーから、たたき台として、上下水道分野のアクターが、原動力となって促進できる目標（A）、間接的に貢献できる目標（B）、社会の一アクターとして尊重すべき目標（C）という分類の例を示しました（下図）。



SDGターゲットを分ける基準のイメージ（企画・運営メンバー内での検討の記録より）

参加者に理解が広がってきた段階で開催したワークショップでは、より深い議論を行う目的で、テーブル毎に話し合うSDGターゲットを分担することにしました。各テーブルでのディスカッション後、全体との整合性を確認することでグルーピングの妥当性を確認するという作業順序です。

たたき台とした分類：個人・都市・水環境・循環型社会・ガバナンス・実施の手段

『IWA 原則～都市の賢明な水管理に向けて～』  
(Principles for Water-Wise Cities) を参考にしました（右図）<sup>22</sup>。



<sup>22</sup> IWA, 2016. IWA 原則～都市の賢明な水管理に向けて～. (日本語版)

[https://iwa-network.org/wp-content/uploads/2016/10/IWA\\_Water\\_Wise\\_Communities\\_japanese.pdf](https://iwa-network.org/wp-content/uploads/2016/10/IWA_Water_Wise_Communities_japanese.pdf)  
(2021年3月1日最終アクセス)。

## Task 6: 「短冊」をまとめて「一覧」にしよう

紙をSDGターゲットごとに切った「短冊」は、模造紙上で貼っては動かして、創造的に作業を進める上で有益です。しかし、ワークショップの回数を重ねる中で管理が難しくなります。そこで、選り分けたSDGターゲットを、グループごとに1枚の紙に収め、「一覧」として固定します。

### 「水×SDGs」の取り組み例

ワーキンググループで一覧を準備する過程で気を付けたのが、量的バランスと配置です。6つのグループで、それぞれ10～15のターゲットを分けました。また、各グループの中で、こういった順番でターゲットを配置するかも、ワークショップ参加者の思考に影響を与えかねませんので、注意を要します。企画・運営メンバーで議論を重ね、関連性を考えて、配置しました（最終的な一覧は、巻末資料に掲載）。

A	
1.4	2030年までに、貧困層及び脆弱層をはじめ、全ての男性及び女性が、 <b>基礎的サービスへのアクセス</b> 、土地及びその他の形態の財産に対する所有権と管理権限、相続財産、天然資源、適切な新技術、マイクロファイナンスを含む金融サービスに加え、経済的資源についても <b>平等な権利</b> を持つことができるように確保する。
11.1	2030年までに、全ての人々の、適切、安全かつ安価な住宅及び <b>基本的サービスへのアクセス</b> を確保し、スラムを改善する。
6.1	2030年までに、 <b>全ての人々の、安全で安価(affordable)な飲料水の普遍的かつ衡平なアクセス</b> を達成する。
6.2	2030年までに、 <b>全ての人々の、適切かつ平等な下水施設・衛生施設(sanitation and hygiene)へのアクセス</b> を達成し、野外での排泄をなくす。女性及び女兒、並びに <b>脆弱な立場にある人々のニーズ</b> に特に注意を払う。
3.3	2030年までに、エイズ、結核、マラリア及び顧みられない熱帯病といった伝染病を根絶するとともに肝炎、 <b>水系感染症</b> 及びその他の感染症に対処する。
1.3	各国において最低限の基準を含む適切な <b>社会保護制度及び対策</b> を実施し、2030年までに貧困層及び脆弱層に対し十分な保護を達成する。
10.2	2030年までに、年齢、性別、障害、人種、民族、出自、宗教、あるいは経済的地位その他の状況に関わりなく、 <b>全ての人々の能力強化及び社会的、経済的及び政治的な包含</b> を促進する。
3.e	開発途上国、特に後発開発途上国及び小島嶼開発途上国において保健財政及び保健人材の採用、 <b>能力開発・訓練</b> 及び定着を大幅に拡大させる。
11.5	2030年までに、貧困層及び <b>脆弱な立場にある人々の保護</b> に焦点をあてながら、 <b>水関連災害</b> などの災害による死者や被災者数を大幅に削減し、世界の国内総生産比で直接的経済損失を大幅に減らす。
1.5	2030年までに、貧困層や脆弱な状況にある <b>人々の強靭性(レジリエンス)</b> を構築し、 <b>気候変動に関連する極端な気象現象</b> やその他の <b>経済、社会、環境的ショック</b> や災害に暴露や脆弱性を軽減する。

ワーキンググループで作成した「一覧」の一部

### C. ワークショップを運営する～ジグソー法の活用例～

上下水道セクターの未来像を描くためには、広く参加者から意見を募ることが不可欠です。その際には、SDGsに枠づけられた議論を行う必要があり、SDGsを日本ごと、水ごと、自分ごとに丁寧に落とし込んでいくことが重要になります（第2章）。

しかし、SDGsについて背景知識を持たない人にとって、突然こうした思考を行うことは難しいでしょう。そこで、このような思考に慣れていない参加者にも議論に関わってもらえるよう、私たちは「水×SDGsジグソー」というワークショップを設計しました。「水×SDGsジグソー」という名称には、パズルのピースのように、いろいろな人とつながりながら一つの絵姿を描いていく、という意味合いが込められています。また、教育分野で使われる手法である「知識構成型ジグソー法」を下敷きにしており<sup>23</sup>、他の人に伝える（説明する）ことによって、自らがその問題を深く考えることにつながるという学習の要素も狙っています。

このワークショップでは、3つのセッションを通して、SDGsを参考にしながら上下水道セクターの将来目標を議論していきます。



ワークショップの様子

<sup>23</sup> 教育で用いられるジグソー法について、以下参照。東京大学CoREFホームページ「知識構成型ジグソー法」  
<https://coref.u-tokyo.ac.jp/archives/5515>（2021年3月1日最終アクセス）。

## 「水×SDGs」の取り組み例

時間：3時間程度

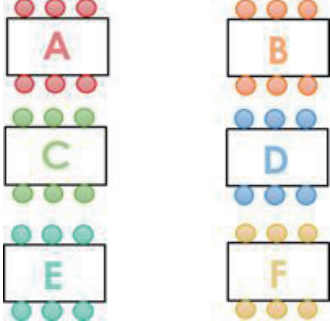
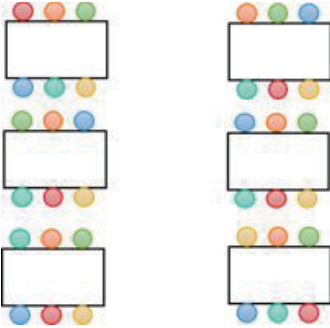
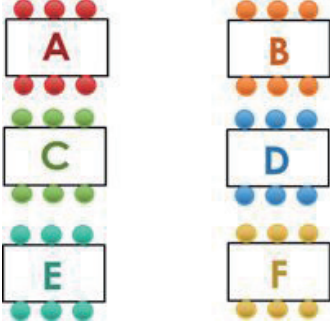
参加人数：30～45人程度

参加者層：水に関わる異業種若手専門家、水に関心を持った一般の方々

### 【準備】

・ストップウォッチ	
・SDGターゲット一覧	SDGターゲット確認用、カラー印刷がよい
・ポストイット、マーカー	参加者の意見記載用。複数色のポストイットとマーカーを用意
・模造紙	参加者の意見集約用
・参加者一覧	事前にグループ分けし、参加者にテーブル番号を書いた紙を配布
・テーブル番号	参加者に見えやすいように貼る

### 【プログラム】

<p>セッション1 ◇「テーマ別」テーブル◇</p> 	<p>SDGsターゲットを6グループに分けた「一覧」を、6つのテーブルに割り当てる。参加者は、テーブルごとに担当となった「一覧」について議論し、別テーブルの参加者（別の「一覧」を話し合っている）に説明できるように、要約を準備する。</p> <p>① 個人ワーク (5分) 参加者が各自で、割り当てられた「一覧」を読み、キーワードを抜き出す。</p> <p>② グループワーク (20分) ファシリテーターが、各参加者から気づきやアイデアを話してもらい、整理する。</p> <p>③ まとめ (5分) 他のグループに伝えたいポイントを確認する。</p>
<p>(移動)</p>	<p>参加者は、別のテーブルに分かれる</p>
<p>セッション2 ◇「ジグソー」テーブル◇</p> 	<p>自分のテーマを知らない参加者に、概要を紹介する。また、他の参加者の紹介を聞きながら、自分がディスカッションしたテーマを相対化し、全体像の大きさを実感してもらう。</p> <p>テーブルでの議論では、様々な視点やアイデアを出してもらうことが目的で、意見を収斂させる必然性はない。</p> <p>① 各テーブルが担当した「一覧」の紹介 (15分) それぞれの発表（短い質問を挟むことも可能だが、テーブルの全員が発表することを優先させる）</p> <p>② 質問やコメント (15分) 余った時間で、質問やコメントを共有したり、全体の関係について意見を募ったりする</p>
<p>(移動)</p>	<p>セッション1のテーブルに戻る。</p>
<p>セッション3 ◇「テーマ別」テーブル◇</p> 	<p>SDGsのターゲットの一覧から、上下水道セクターのゴール（目標）（≒目指すべき社会像）を考える。</p> <p>① リフレクション 「ジグソー」テーブルでの気づきや、他のテーマとの違いで気づいた点を、それぞれの参加者から話してもらう。</p> <p>② 目標を考える 自分のテーブルに割り当てられた「SDGターゲット一覧」をゴールとしてまとめる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● キーワード・アイデアの重要度や整理を見直す（＝意見を出し合う）</li> <li>● ターゲット一覧から得られた発想をもとに、このテーブルとして社会に訴えたいことは何か？（このテーブルにしかできない主張）</li> </ul>

※ 詳細な手順は、巻末資料をご覧ください

## おわりに

Japan-YWP「水×SDGs」ワーキンググループが議論し提示したメソッドを紹介してきました。その斬新さは、SDGsをいわば触媒として活用したところにあると言えます。SDGsを用いることで、同じセクターに関わる様々な立場の人々が協力して共通の目標を練り上げる過程を実践し、振り返ることで構造化して提示しました。このメソッドは、様々な組織や場面でビジョン・戦略づくりの過程を設計する際に、どういう順序で作業をすれば、SDGsからヒントを得つつ、参加者の発想を尊重できるのか、枠組みを提示しています。具体的に作業を行う際には、必要性や状況に即してワークショップのやり方や回数などをアレンジしていただくことができます。

今回の活動では十分に向き合えなかった重要な論点もあります。

一つ目に、ワーキンググループではSDGsを理解し、活用することに主眼を置いたため、SDGs自体に対する建設的な批判を深められていないことです。SDGsは、何ら完璧なものではありません。例えば、SDGsには文化をはじめとした非物質的な要素が不十分にしか取り入れられていないという指摘があります<sup>24</sup>。あるいは、「持続可能な発展」に加え、維持管理という継続の角度から、レジリエンスをもっと強調すべきかもしれません。実際に、『2030アジェンダ』決議の前文では、「我々は、世界を持続的かつレジリエントな道筋に移行させるために緊急に必要な、大胆かつ変革的な手段をとることを決意している」と謳われています<sup>25</sup>。2019年に24歳の若者は、2030年には35歳。2050年になってやっと55歳です。私たち若手が活躍する将来を見据えれば、2016-2030年を期間とするSDGsはひとつのステップにすぎません。若手の間でSDGsに欠けている視点や新たな問題設定の枠組みを指摘することを通して、SDGs後、post-2030の2050年を目標とした行動計画づくりの足掛かりを準備していくことも既に求められているかもしれません<sup>26</sup>。

二つ目に、ワーキンググループで関心を集めたものの取り組めなかった事柄に、SDGsの達成に向けた進捗の程度を示す指標があります。国連で定められている指標を国内の統計に対応させ、自治体レベルでの政策にもつなげる試みは、既に進められています<sup>27</sup>。併せて、新たに自分たちの手で定めた目標やターゲットに対応した指標を考案することも可能です。既存の統計を活用したり、場合によっては新たな指標を構築することも必要になるかもしれません。指標によって単純化して状況を把握できるようになる反面、SDGsの重要な側面が計測から漏れる、あるいは指標の値のみに目が行くことで大局的な目標を見失うなど危険が伴うので、注意が必要です。

三つ目に、SDGsの自分ごと化を進め、行動へとつなげていくことが何よりも重要です。そして今、新型コロナウイルス感染症という危機に直面する私たちは、肌で「持続的」で「レジリエントな」社会へと変革していくことの必要を感じているのではないのでしょうか。この状況をいかにチャンスへと変えていくことができるか、私たちは問われているようにも思われます。

<sup>24</sup> 沖大幹, 2018. 2030年のSDGs達成とBeyond SDGsへ向けて. 白田範史 編. SDGsの基礎. 事業構想大学院大学出版部. 154-157頁.

<sup>25</sup> 国連, 2015. 前掲. 前文 (強調付記).

<sup>26</sup> Japan-YWPのこれまでの活動として、「Japan-YWP Water-Wise Innovation Challenge! ~Mission for Phnom Penh Cambodia~」(2018年1月28日) IWA世界会議ワークショップ「Post SDGs Future Vision Call」(2018年9月17日)。詳細は、イベントページ <http://www.japan-ywp.site/event/2018.html>、ニュースレター第15号(2018年3月12日発行)・第17号(2018年11月30日発行) <http://www.japan-ywp.site/newsletter.html> をご覧ください(2021年3月1日最終アクセス)。

<sup>27</sup> 内閣府地方創生推進事務局 自治体SDGs推進評価・調査検討会, 2019. 地方創生SDGsローカル指標リスト(第一版). <https://www.kantei.go.jp/jp/singi/tiiki/kankyo/kaigi/suisinhyouka.html> (2021年3月1日最終アクセス)。

# 巻末資料

## 1. 活動の流れ

年月日	開催回・テーマ
2018年 5月26日(土)	Japan-YWPワークショップ 「水×SDGs—変革のための道しるべを探す—」
6月30日(土)	「水×SDGs」勉強会 第1回
8月18日(土)	「水×SDGs」勉強会 第2回
10月 8日(月・祝)	「水×SDGs」勉強会 第3回 『SDGsから見る、水道事業体の目標・指標の現状』
2019年 3月23日(土)	「水×SDGs」ワーキンググループ 第1回 『水の未来予想2030』
5月11日(土)	「水×SDGs」ワーキンググループ 第2回 『169のターゲットを水の視点から一緒に見てみよう!』
6月 8日(土)	「水×SDGs」ワーキンググループ 第3回 『SDGsターゲットを日本ごととして見たらどうなるだろう?』
7月13日(土)	「水×SDGs」ワーキンググループ 第4回 『上下水道のSDGs、目標はいくつ?～スローガンを考えてみよう～』
8月31日(土)	「水×SDGs」ワーキンググループ 第5回 『これが、私たちが考えるSDGs!』
11月16日(土)	「水×SDGs」ワーキンググループ 第6回 ミーティング
2020年 1月25日(土)	「水×SDGs」ワーキンググループ 第7回 オープン・ワークショップ 『～SDGsの日本ごと化・自分ごと化・水ごと化～』

※各回の活動報告は、Japan-YWPホームページのイベント欄からご確認いただけます。

### 第1回ワークショップ 『水の未来予想2030』

(当日)

ワーキンググループとして行う活動の第一弾として、2030年における上下水道の最悪シナリオを考えた。その上で、関連する169のターゲットから行動目標を具体化することとした。最悪シナリオは人権、環境、経済経営の3テーマに分けて検討した。具体的な進め方は次のとおりである。まず、話しやすい人数となるようにワークショップ参加者にテーブルごとに分かれてもらい、自由に気になっている課題を挙げてもらった(ブレインストーミング)。その後、主な課題を結びつけ、どういった大きな問題が発生しうるのか、想像を膨らませてもらった。最後に、各テーブルから発表してもらった。



2030年の最悪シナリオはテーマごとにある程度具体化できたが、具体的な目標のためにはSDGsのどのターゲットが関連するか、上下水道セクターの自分事として考える必要性を感じるようになった。上下水道セクターの未来予測に際し、事前にデータや資料などを共有しておくことができれば、ワークショップで具体的かつ現実的な話をする事ができたであろう。

## 第2回ワークショップ 『169のターゲットを水の視点から一緒に見てみよう！』

### (事前準備1)

ワーキンググループの企画・運営メンバーが事前準備として169のSDGターゲットを一覧表にしなが、上下水道セクターに関連するもの、関連がうすいものに分けていった。関連するものは、さらにテーマや関連の度合いでメリハリ付けが必要であると考え、模造紙上でターゲットを適宜動かしながら議論することとした。その作業のため、ターゲットごとの短冊を準備することにした（準備方法については、「『SDGターゲット短冊』の準備」に記載）。

事前エクササイズとして、ワーキンググループのメンバー各自で169のターゲットをすべて読んでもらった。

### (事前準備2当日)

- ①169すべてのターゲットについて、上下水道セクターの立場から、SDGs達成のために主体的に行動すべきターゲットを「A」・貢献できるもしくは貢献すべきターゲットを「B」・関わりがうすいターゲットを（空欄）として3つのカテゴリーに分けた。各自で行った分類を集計し、誰かひとりでもAと回答していれば“A”、Bのみであれば“B”、A・Bどちらにも当てはまらない場合は“空欄”として回答を集計した。すなわち、多数決ではなく、少数派の意見を取りこぼさないために、丁寧に意見を集めた。
- ②①の作業の結果、“空欄”となったターゲットは、上下水道セクターからの貢献度が低いと判断し、ワークショップ前に記録（灰色に着色化）した。なお、削除せずに灰色にした理由は、ワークショップ当日に「本当に関わりがうすいのか？」「上下水道セクターが貢献できそうにないか？」といった質問を通して参加者に確認するためである。

エクササイズの説明				
	SDGターゲットから上下水道分野に関わるものを選んで、その関連のしかたによってA、B、（空欄）を記入してください。			
	※具体的な表現（例：「開発途上国」を対象としていること、定義、目標数値など）は捨象し、後に日本の文脈に沿う文書に変換する前提でご回答ください。			
カテゴリー				
A	上下水道業界が主体となって達成に向けて行動すべき目標			
B	上下水道業界として、貢献できるor貢献すべき目標			
(空欄)	上下水道には関連しない（※事務局で関係が薄いと考えたものについては灰色にしていますが、AやBの回答を記入いただくことに問題ございません）			
2.1	2030年までに、飢餓を撲滅し、全ての人々、特に貧困層及び幼児を含む脆弱な立場にある人々が一年中安全かつ栄養のある食料を十分得られるようにする。	A	2	5
2.2	5歳未満の子供の発育障害や消耗性疾患について国際的に合意されたターゲットを2025年までに達成するなど、2030年までにあらゆる形態の栄養不良を解消し、若年女子、妊婦・授乳婦及び高齢者の栄養ニーズへの対応を行う。	A	1	2
2.3	2030年までに、土地、その他の生産資源や、投入財、知識、金融サービス、市場及び高付加価値化や非農業雇用の機会への確実かつ平等なアクセスの確保などを通じて、女性、先住民、家族農家、牧畜民及び漁業者をはじめとする小規模食料生産者の農業生産性及び所得を増加させる。	B	0	1
2.4	2030年までに、生産性を向上させ、生産量を増やし、生態系を維持し、気候変動や極端な気象現象、干ばつ、洪水及びその他の災害に対する適応能力を向上させ、漸進的に土地と土壌の質を改善させるような、持続可能な食料生産システムを確保し、強靱（レジリエント）な農業を实践する。	A	2	11
2.5	2020年までに、国、地域及び国際レベルで適正に管理及び多様化された種子・植物バンクなどを通じて、種子、栽培植物、飼育・家畜化された動物及びこれらの近縁野生種の遺伝的多様性を維持し、国際的合意に基づき、遺伝資源及びこれに関連する伝統的な知識へのアクセス及びその利用から生じる利益の公正かつ衡平な配分を促進する。		0	0
2.a	開発途上国、特に後発開発途上国における農業生産能力向上のために、国際協力の強化などを通じて、農村インフラ、農業研究・普及サービス、技術開発及び植物・家畜のジェノム・バンクへの投資の拡大を図る。		0	0

## (当日)

- (1) ②で灰色としたターゲットについて空欄については、本当に上下水道セクターの関わりがうすいターゲットか議論し、精査した。関わりがうすいターゲットを確定させた後には削除するため、後戻りすることを避けるためにも、この作業は注意深く行った。
- (2) ①でAに分類していたターゲットについては、本当に主体的に行動すべきターゲットか注意深く検討した。
- (3) ①でBに分類していたターゲットについては、Aにすべきもの、空欄にすべきものはないか、時間が許す限り議論した。

SDGターゲットは数が多く、読み通すだけでも参加者にとってハードであったが、真剣に取り組んでいただけた。成果として、SDGs達成のために主体的に行動すべきターゲット（A）と、上下水道セクターとは関係のないターゲット（灰色に着色）をある程度洗い出すことができた。

## 第3回ワークショップ『SDGsターゲットを日本ごととして見たらどうなるだろう？』

### (事前準備)

第2回ワークショップの作業を継続しつつ、さらに個別のターゲットの内容について検討を進めるため、以下の作業を行った。

- (1) ターゲットに記載のある“途上国支援に関する文言”は、その「あり方」についてのターゲットに留め、議論の重きをSDGsの「日本ごと化」・「自分ごと化」に置く。
- (2) 定義がよく分からない単語はリストアップをし、重点的に説明した。
- (3) 前回のA、B、それ以外の仕分けやグルーピングをやりやすくするため、169のターゲットを印刷し、「短冊」のように切り取った。

## (当日)

参加者にグループに分かれてもらい、それぞれで以下の作業を進めた。

- (1) Aに分類したターゲットを軸に置き、個々のSDGターゲットを模造紙上で動かし、貼れるよう、「短冊」を用いて、A・B共に近いターゲット毎にまとめつつ、内容について議論を進めた。出されたコメントは付箋にメモし、記録した。
- (2) Bとなったターゲットは本当に貢献できるもしくは貢献すべきターゲットか議論し精査した（ターゲット分けのポイントについては、「SDGターゲットの選別」に記載）。



模造紙上で行った作業の例

## 第4回ワークショップ

### 『上下水道のSDGs、目標はいくつ?～スローガンを考えてみよう～』

#### (事前準備)

SDGsのターゲットが絞られ、上下水道セクターの立場からの関係性も少しずつ見えてきたため、次は国連で定められた17目標とは異なる整理の仕方ができないか、検討することとした。そこで、上下水道を軸に選別してきたSDGターゲットをグルーピングするため、たたき台として「個人・都市・水環境・循環型社会・ガバナンス・実施の手段」の6つの側面を設定した（「選抜したSDGターゲットのグループ化（たたき台づくり）」に記載）。

また、前回のターゲットの文章のうち、特に強調すべき文言をハイライトした。

17.18 2020年までに、後発開発途上国及び小島嶼開発途上国を含む開発途上国に対する能力構築支援を強化し、所得、性別、年齢、人種、民族、居住資格、障害、地理的位置及びその他各国事情に関連する特異性の質が高く、タイムリーかつ信頼性のある非集計型データの入手可能性を向上させる。

#### (当日)

参加者には、作業を行うテーブルに分かれていただき、次の作業を行った。

- (1) テーブルごとに、SDGターゲットを6つの側面に沿ってグルーピングした。
- (2) グループ化した6つのまとまりごとに関連するキーワードやアイデアを抽出し、それを基にそれぞれの上下水道セクターのスローガンを出し合った。



模造紙上で整理したSDGターゲットの例

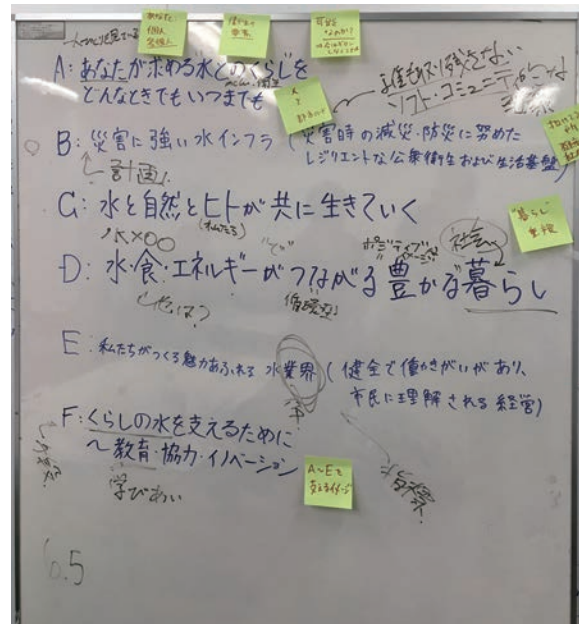
## 第5回ワークショップ『これが、私たちが考えるSDGs!』

### (事前準備)

これまでのワークショップでSDGターゲットの絞り込みとグルーピングを進めており、この作業を一端終えることを目標とすることにした。そこで、『これが私たちが考えるSDGs!』と銘打ち、上下水道セクターに特化したSDGsへ一段とフォーカスするテーマを設定した。

### (当日)

前回のワークショップで行ったSDGターゲットのグルーピングや、提案されたスローガンを確認するため、参加者に6つのテーブルに分かれていただき、それぞれの内容を議論していただいた。その上で、テーブルごとに1つのスローガンを作成した。



スローガンをまとめている様子

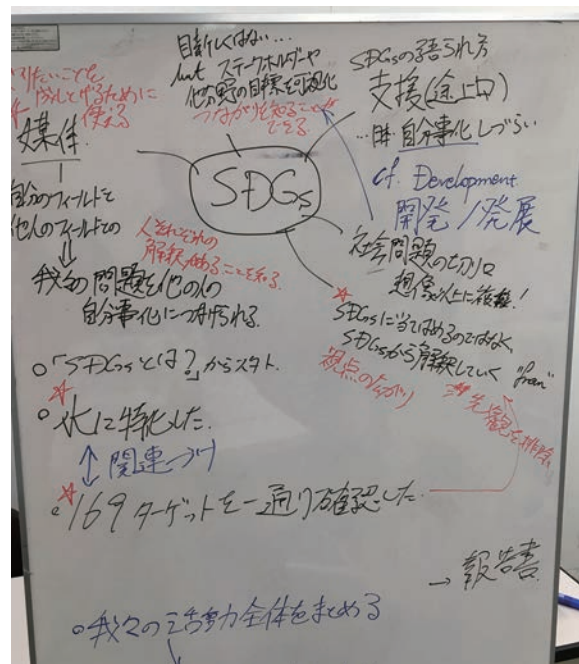
## 第6回ミーティング

### (事前準備)

運営メンバーで、これまでの議論の過程や議論の結果明らかになったカテゴリーやスローガンについて、どのような対象者にどのような形で共有していくかを議論した。その上で、「水×SDGs」として何を伝えたいか、そのコンセプトを振り返った。

### (当日)

ワーキンググループのミーティングとして、①これまでの活動の振り返り、②2020年1月25日に開催する「水×SDGs」ワークショップでアクティビティを試し、それを踏まえて、③どういった形で成果をまとめるか、意見交換を行った。



出された意見をまとめたホワイトボード

## 2. 活動の成果

### 成果1 「水×SDGs」ターゲット一覧

Japan-YWP「水×SDGs」ワーキンググループでは、国連で定められている169のSDGターゲットから69をより選び、重要部分をハイライトし、日本の上下水道セクターの視点で分類しなおしました。こうした一連の作業の結果、以下のターゲットの一覧を作成しました。

A	
1.4	2030年までに、貧困層及び脆弱層をはじめ、全ての男性及び女性が、 <b>基礎的サービスへのアクセス</b> 、土地及びその他の形態の財産に対する所有権と管理権限、相続財産、天然資源、適切な新技術、マイクロファイナンスを含む金融サービスに加え、経済的資源についても <b>平等な権利</b> を持つことができるように確保する。
11.1	2030年までに、全ての人々の、適切、安全かつ安価な住宅及び <b>基本的サービスへのアクセス</b> を確保し、スラムを改善する。
6.1	2030年までに、 <b>全ての人々の、安全で安価(affordable)な飲料水の普遍的かつ衡平なアクセス</b> を達成する。
6.2	2030年までに、 <b>全ての人々の、適切かつ平等な下水施設・衛生施設(sanitation and hygiene)へのアクセス</b> を達成し、野外での排泄をなくす。女性及び女児、並びに <b>脆弱な立場にある人々のニーズ</b> に特に注意を払う。
3.3	2030年までに、エイズ、結核、マラリア及び顧みられない熱帯病といった伝染病を根絶するとともに肝炎、 <b>水系感染症</b> 及びその他の感染症に対処する。
1.3	各国において最低限の基準を含む適切な <b>社会保護制度及び対策</b> を実施し、2030年までに貧困層及び脆弱層に対し十分な保護を達成する。
10.2	2030年までに、年齢、性別、障害、人種、民族、出自、宗教、あるいは経済的地位その他の状況に関わりなく、 <b>全ての人々の能力強化及び社会的、経済的及び政治的な包含</b> を促進する。
3.c	開発途上国、特に後発開発途上国及び小島嶼開発途上国において保健財政及び保健人材の採用、 <b>能力開発・訓練</b> 及び定着を大幅に拡大させる。
11.5	2030年までに、貧困層及び <b>脆弱な立場にある人々の保護</b> に焦点をあてながら、 <b>水関連災害</b> などの災害による死者や被災者数を大幅に削減し、世界の国内総生産比で直接的経済損失を大幅に減らす。
1.5	2030年までに、貧困層や脆弱な状況にある <b>人々の強靭性(レジリエンス)</b> を構築し、 <b>気候変動に関連する極端な気象現象</b> やその他の <b>経済、社会、環境的ショック</b> や <b>災害</b> に <b>暴露</b> や <b>脆弱性</b> を軽減する。
B	
9.1	全ての人々に <b>安価で公平なアクセス</b> に重点を置いた <b>経済発展と人間の福祉</b> を支援するために、地域・越境インフラを含む <b>質の高い、信頼でき、持続可能かつ強靭(レジリエント)なインフラ</b> を開発する。
11.3	2030年までに、 <b>包摂的かつ持続可能な都市化</b> を促進し、全ての国々の参加型、包摂的かつ持続可能な <b>人間居住計画・管理</b> の能力を強化する。
13.2	気候変動対策を国別の政策、戦略及び計画に盛り込む。
11.b	2020年までに、 <b>包含、資源効率、気候変動の緩和と適応、災害に対する強靭さ(レジリエンス)</b> を目指す <b>総合的政策及び計画</b> を導入・実施した都市及び人間居住地の件数を大幅に増加させ、仙台防災枠組2015-2030に沿って、あらゆるレベルでの <b>総合的な災害リスク管理</b> の策定と実施を行う。
6.4	2030年までに、全セクターにおいて <b>水利用の効率</b> を大幅に改善し、 <b>淡水の持続可能な採取及び供給</b> を確保し水不足に対処するとともに、水不足に悩む人々の数を大幅に減少させる。
11.a	各国・地域規模の開発計画の強化を通じて、 <b>経済、社会、環境面</b> における <b>都市部、都市周辺部及び農村部間の良好なつながり</b> を支援する。
11.7	2030年までに、 <b>女性、子供、高齢者及び障害者</b> を含め、人々に <b>安全で包摂的かつ利用が容易な緑地や公共スペース</b> への <b>普遍的アクセス</b> を提供する。
3.6	2020年までに、世界の <b>道路交通事故</b> による死傷者を半減させる。
11.c	財政的及び技術的な支援などを通じて、後発開発途上国における現地の資材を用いた、 <b>持続可能かつ強靭(レジリエント)な建造物</b> の整備を支援する。
11.6	2030年までに、 <b>大気</b> の質及び <b>一般並びにその他の廃棄物の管理</b> に特別な注意を払うことによるものを含め、都市の一人当たりの <b>環境上の悪影響</b> を軽減する。

C	
6.5	2030年までに、国境を越えた適切な協力を含み、あらゆるレベルでの統合水資源管理を実施する。
6.3	2030年までに、汚染の減少、投棄の廃絶と有害な化学物・物質の放出の最小化、未処理の排水の割合半減及び再生利用と安全な再利用の世界的規模で大幅に増加させることにより、水質を改善する。
3.9	2030年までに、有害化学物質、並びに大気、水質及び土壌の汚染による死亡及び疾病の件数を大幅に減少させる。
14.1	2025年までに、海洋ごみや富栄養化を含み、特に陸上活動による汚染など、あらゆる種類の海洋汚染を防止し、大幅に削減する。
6.6	2020年までに、山地、森林、湿地、河川、帯水層、湖沼を含む水に関連する生態系の保護・回復を行う。
11.4	世界の文化遺産及び自然遺産の保護・保全の努力を強化する。
15.1	2020年までに、国際協定の下での義務に則って、森林、湿地、山地及び乾燥地をはじめとする陸域生態系と内陸淡水生態系及びそれらのサービスの保全、回復及び持続可能な利用を確保する。
15.2	2020年までに、あらゆる種類の森林の持続可能な経営の実施を促進し、森林減少を阻止し、劣化した森林を回復し、世界全体で新規植林及び再植林を大幅に増加させる。
15.4	2030年までに持続可能な開発に不可欠な便益をもたらす山地生態系の能力を強化するため、生物多様性を含む山地生態系の保全を確実にを行う。
15.8	2020年までに、外来種の侵入を防止するとともに、これらの種による陸域・海洋生態系への影響を大幅に減少させるための対策を導入し、さらに優先種の駆除または根絶を行う。
15.b	保全や再植林を含む持続可能な森林経営を推進するため、あらゆるレベルのあらゆる供給源から、持続可能な森林経営のための資金の調達と開発途上国への十分なインセンティブ付与のための相当量の資源を動員する。

D	
8.4	2030年までに、世界の消費と生産における資源効率を漸進的に改善させ、先進国主導の下、持続可能な消費と生産に関する10年計画枠組みに従い、経済成長と環境悪化の分断を図る。
9.4	2030年までに、資源利用効率の向上とクリーン技術及び環境に配慮した技術・産業プロセスの導入拡大を通じたインフラ改良や産業改善により、持続可能性を向上させる。全ての国々は各国の能力に応じた取組を行う。
12.2	2030年までに天然資源の持続可能な管理及び効率的な利用を達成する。
2.4	2030年までに、生産性を向上させ、生産量を増やし、生態系を維持し、気候変動や極端な気象現象、干ばつ、洪水及びその他の災害に対する適応能力を向上させ、漸進的に土地と土壌の質を改善させるような、持続可能な食料生産システムを確保し、強靱(レジリエント)な農業を实践する。
7.2	2030年までに、世界のエネルギーミックスにおける再生可能エネルギーの割合を大幅に拡大させる。
7.3	2030年までに、世界全体のエネルギー効率の改善率を倍増させる。
7.a	2030年までに、再生可能エネルギー、エネルギー効率及び先進的かつ環境負荷の低い化石燃料技術などのクリーンエネルギーの研究及び技術へのアクセスを促進するための国際協力を強化し、エネルギー関連インフラとクリーンエネルギー技術への投資を促進する。
12.4	2020年までに、合意された国際的な枠組みに従い、製品ライフサイクルを通じ、環境上適正な化学物質や全ての廃棄物の管理を実現し、人の健康や環境への悪影響を最小化するため、化学物質や廃棄物の大気、水、土壌への放出を大幅に削減する。
12.5	2030年までに、廃棄物の発生防止、削減、再生利用及び再利用により、廃棄物の発生を大幅に削減する。
12.7	国内の政策や優先事項に従って持続可能な公共調達の慣行を促進する。

E	
16.7	あらゆるレベルにおいて、 <b>対応的、包摂的、参加型及び代表的な意思決定</b> を確保する。
5.5	政治、経済、公共分野での <b>あらゆるレベルの意思決定</b> において、 <b>完全かつ効果的な女性の参画及び平等なリーダーシップの機会</b> を確保する。
16.6	あらゆるレベルにおいて、 <b>有効で説明責任のある透明性の高い公共機関</b> を発展させる。
16.5	<b>あらゆる形態の汚職や贈賄</b> を大幅に減少させる。
12.6	<b>特に大企業や多国籍企業などの企業</b> に対し、 <b>持続可能な取り組み</b> を導入し、 <b>持続可能性に関する情報を定期報告</b> に盛り込むよう奨励する。
17.19	2030年までに、 <b>持続可能な開発の進捗状況</b> を測るGDP以外の尺度を開発する既存の取組を更に前進させ、 <b>開発途上国における統計</b> に関する能力構築を支援する。
17.18	2020年までに、 <b>後発開発途上国及び小島嶼開発途上国</b> を含む <b>開発途上国</b> に対する <b>能力構築支援</b> を強化し、 <b>所得、性別、年齢、人種、民族、居住資格、障害、地理的位置及びその他各国事情</b> に関連する <b>特異性の質が高く、タイムリーかつ信頼性のある非集計型データ</b> の入手可能性を向上させる。
4.4	2030年までに、 <b>技術的・職業的スキルなど、雇用、働きがいのある人間らしい仕事及び起業に必要な技能を備えた若者と成人</b> の割合を大幅に増加させる。
8.5	2030年までに、 <b>若者や障害者</b> を含む <b>全ての男性及び女性の、完全かつ生産的な雇用及び働きがいのある人間らしい仕事</b> 、並びに <b>同一労働同一賃金</b> を達成する。
8.8	<b>移住労働者</b> 、特に <b>女性の移住労働者や不安定な雇用状態にある労働者</b> など、 <b>全ての労働者の権利を保護し、安全・安心な労働環境</b> を促進する。
10.3	差別的な法律、政策及び慣行の撤廃、並びに <b>適切な関連法規、政策、行動の促進</b> などを通じて、 <b>機会均等</b> を確保し、 <b>成果の不平等</b> を是正する。
5.b	女性の能力強化促進のため、 <b>ICTをはじめとする実現技術の活用</b> を強化する。
5.4	公共のサービス、インフラ及び <b>社会保障政策</b> の提供、並びに <b>各国の状況に応じた世帯・家族内における責任分担</b> を通じて、 <b>無報酬の育児・介護</b> や <b>家事労働</b> を認識・評価する。

F	
17.17	さまざまなパートナーシップの経験や資源戦略を基にした、 <b>効果的な公的、官民、市民社会のパートナーシップ</b> を奨励・推進する。
17.16	全ての国々、特に <b>開発途上国</b> での <b>持続可能な開発目標の達成</b> を支援すべく、 <b>知識、専門的知見、技術及び資金源</b> を動員、共有する <b>マルチステークホルダー・パートナーシップ</b> によって補完しつつ、 <b>持続可能な開発のためのグローバル・パートナーシップ</b> を強化する。
6.b	水と衛生に関わる分野の <b>管理向上</b> における <b>地域コミュニティの参加</b> を支援・強化する。
4.7	2030年までに、 <b>持続可能な開発のための教育</b> 及び <b>持続可能なライフスタイル</b> 、 <b>人権、男女の平等、平和及び非暴力的文化の推進、グローバル・シチズンシップ</b> 、 <b>文化多様性と文化の持続可能な開発への貢献の理解</b> の <b>教育</b> を通して、 <b>全ての学習者が、持続可能な開発を促進するために必要な知識及び技能を習得できるようにする</b> 。
12.8	2030年までに、人々があらゆる場所において、 <b>持続可能な開発及び自然と調和したライフスタイル</b> に関する <b>情報と意識</b> を持つようにする。
13.3	<b>気候変動の緩和、適応、影響軽減及び早期警戒</b> に関する <b>教育、啓発、人的能力及び制度機能</b> を改善する。
9.b	<b>産業の多様化</b> や <b>商品への付加価値創造</b> などに資する <b>政策環境の確保</b> などを通じて、 <b>開発途上国の国内における技術開発、研究及びイノベーション</b> を支援する。
8.3	<b>生産活動</b> や <b>適切な雇用創出、起業、創造性及びイノベーション</b> を支援する <b>開発重視型の政策</b> を促進するとともに、 <b>金融サービスへのアクセス改善</b> などを通じて <b>中小零細企業</b> の <b>設立</b> や <b>成長</b> を奨励する。
8.9	2030年までに、 <b>雇用創出、地方の文化振興・産品販促</b> につながる <b>持続可能な観光業</b> を促進するための <b>政策</b> を立案し実施する。
8.2	<b>高付加価値セクター</b> や <b>労働集約型セクター</b> に重点を置くことなどにより、 <b>多様化、技術向上及びイノベーション</b> を通じた <b>高いレベルの経済生産性</b> を達成する。
9.5	2030年までに <b>イノベーション</b> を促進させることや <b>100万人当たりの研究開発従事者数</b> を大幅に増加させ、また <b>官民研究開発の支出</b> を拡大させるなど、 <b>開発途上国</b> をはじめとする <b>全ての国々の産業セクター</b> における <b>科学研究</b> を促進し、 <b>技術能力</b> を向上させる。
4.3	2030年までに、 <b>全ての人が男女の区別なく、手の届く質の高い技術教育・職業教育</b> 及び <b>大学</b> を含む <b>高等教育</b> への <b>平等なアクセス</b> を得られるようにする。
17.6	<b>科学技術イノベーション(STI)</b> 及びこれらへの <b>アクセス</b> に関する <b>南北協力、南南協力及び地域的・国際的な三角協力</b> を向上させる。また、 <b>国連レベル</b> をはじめとする <b>既存のメカニズム間の調整改善</b> や、 <b>全世界的な技術促進メカニズム</b> などを通じて、 <b>相互に合意した条件</b> において <b>知識共有</b> を進める。
6.a	2030年までに、 <b>集水、海水淡水化、水の効率的利用、排水処理、リサイクル・再利用技術</b> を含む <b>開発途上国における水と衛生分野での活動と計画</b> を対象とした <b>国際協力と能力構築支援</b> を拡大する。
4.b	2020年までに、 <b>開発途上国</b> 、特に <b>後発開発途上国及び小島嶼開発途上国</b> 、並びに <b>アフリカ諸国</b> を対象とした、 <b>職業訓練、情報通信技術(ICT)、技術・工学・科学プログラム</b> など、 <b>先進国及びその他の開発途上国</b> における <b>高等教育の奨学金</b> の件数を <b>全世界</b> で大幅に増加させる。

## 成果② 「水×SDGs」 ワークショップ

2020年1月25日（土）に開催した、『「水×SDGs」オープン・ワークショップ～SDGsの日本ごと化・自分ごと化・水ごと化～』の当日の流れを記載しています。

時間	活動	ファシリテーション
開場～挨拶・趣旨説明		
	会場準備～開場	<ul style="list-style-type: none"> <li>▶受付で、参加者に、着席してもらうテーブル番号を指定すると、スムーズかつバランスよく参加者を配置できる。</li> <li>▶各テーブルのファシリテーターは、雰囲気づくりをする。（この時点で、アイスブレイクにつながるワークを開始することも可）</li> </ul>
5分	開始	(開会のあいさつなど)
10分	アイスブレイク	<p>(一例)</p> <p>目標：各テーブルで、チーム名をつける！！</p> <p>方法：①メンバーの共通点を見つける ②共通点からチーム名をにする ③各チームからチーム名を発表する</p> <p>例：みんな眼鏡をかけている⇒チーム名「メガネチーム」 みんな揚げ物と凧あげが好き⇒チーム名「アゲアゲ」</p>
20分	趣旨説明	<p>(以下の点を説明)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・このワークショップで何を得たいか？(目的)</li> <li>・なぜSDGsを用いるのか？どのような効果が期待できるか？</li> </ul> <p>(必要に応じて、質疑応答の時間を確保する)</p>
ワークショップ本体		
10分	概要説明	<p>(各テーブルに配布する物が行き渡っているかを確認します)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「SDGsの一覧」</li> <li>・ポストイット、ペン、模造紙</li> </ul> <p>▶ワークショップの進め方を大まかに説明する。</p>
30分	セッション1	<p>◇「テーマ別」テーブル◇</p> <p>各テーブルで、割り当てられた「SDGターゲットの一覧」を議論します。各参加者が、含意を読み取り、別テーブルの参加者(=別の「一覧」を話し合っている)に説明できるように、要約を準備をします。</p> <p>①個人ワーク(5分)</p> <p>参加者が各自で、割り当てられた「SDGターゲットの一覧」を読む時間をとる。この時、わからない所は飛ばして構わない、途上国のターゲットとして読むのではなく日本の文脈に合わせて読むようにする、といった読み方の注意を伝えておく。</p> <p>具体的な作業として、印象に残ったキーワードを3～5個ほど抜き出してもらい、ポストイットに書いてもらう。ファシリテーターは、参加者が書いたポストイットを順次集め、模造紙上に配置する(同じものは重ねる、関連性があるものは近く、別の視点で遠くに配置)。</p>



		<p>②グループワーク (20分)</p> <p>ファシリテーターは、模造紙に出ているキーワードを見ながら、参加者に話を振る(全員が発言できるように配慮し、1分以上連続ではしゃべらせない)。話を振るときは、順番ではなく、キーワード群ごとに聞くとダイナミックに話が展開できる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● なぜそのキーワードを選んだか?</li> <li>● 一覧全体から出てくるアイデアは何か?</li> <li>● 日本の上下水道の課題</li> </ul> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>&lt;デモンストレーション&gt;</p> <p>ワークをイメージしてもらうために、デモンストレーションを行う場合の例。</p> <p>A: 「印象に残ったキーワードは? (3つほど)」</p> <p>B: 「そうですね…基礎的サービスへのアクセス、普遍的かつ公平なアクセス、脆弱な立場」 (一覧のどこにキーワードがあるか、場所を示せるとよい)</p> <p>A: どうして「アクセス」を選びましたか?</p> <p>B: 「供給側ではなく、需給者側の市民の権利の視点が印象的だったからです。」</p> <p>A: 「選んでいただいたキーワード、あるいは一覧の全体から、日本の上下水道のあるべき姿を描くのにつながりそうなアイデアは何か得られましたか?」</p> <p>B: 「私たち、上下水道システムに携わる者の視点だけではならず、市民が求める水との関わりを考える必要がわかりました。」</p> <p>A: 「そのあるべき社会像との比較で、日本の上下水道について、どういった課題が気になりますか?」</p> <p>B: 「今はいいかもしれないけど、将来、災害時も含めて、上下水道へのアクセスを確保し続けられるか、について」</p> <p>A: 「SDGsの視点で、こうした課題を乗り越えた社会像を描いていくことが必要ですね。」</p> </div> <p>③まとめ (5分)</p> <p>他のグループに伝えたいポイントを、参加者からそれぞれ説明してもらう(テーブルでの合意を作るよりも、個々人が重要なキーワードやアイデアを理解し、説明できるか確認する)</p>
	(移動)	<p>ファシリテーターは同じテーブルに残り、他の参加者には、人数を見ながら別のテーブルに分かれる。</p> <p>次のセッションに向け、机の上をきれいにする。</p>
30分	セッション2	<p>◇「ジグソー」テーブル◇</p> <p>ここでは、自分のテーマを知らない参加者に、概要を紹介します。また、他の参加者の紹介を聞きながら、自分がディスカッションしたテーマを相対化し、全体像の大きさを実感してもらうのが目的です。テーブルでの議論では、様々な視点やアイデアを出してもらうことが目的で、意見を収斂させる必然性はありません。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● それぞれの発表(短い質問を挟んでいただいてもいいですが、とりあえずテーブルの全員が発表することを優先させる)(15分)</li> <li>● 聴いている参加者には、発表者に対しポストイットに質問やコメントを書いて渡してもらう(可能な限り)</li> <li>● 余った時間で、質問やコメントを共有したり、全体の関係性について意見を募ったりする(15分)</li> </ul>

	(移動)	セッション1のテーブルに戻る。
30分	セッション3	<p>◇「テーマ別」テーブル◇</p> <p>各テーブルで、テーマを再び確認する。SDGsのターゲットの一覧から、上下水道セクターのゴール（目標）（≒目指すべき社会像）を考える。</p> <p>①リフレクション</p> <p>「ジグソー」テーブルでの気づきや、他のテーマとの違いで気づいた点を、それぞれの参加者から話してもらう。</p> <p>②目標を考える</p> <p>自分のテーブルに割り当てられた「SDGターゲット一覧」をゴールとしてまとめる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● キーワード・アイデアの重要度や整理を見直す(=意見を出し合う)</li> <li>● 改めて、ターゲット一覧から得られた発想をもとに、このテーブルとして社会に訴えたいことは何ですか？(このテーブルにしかできない主張をする)</li> </ul>
20分	全体セッション	<p>◇目標の発表◇</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● ファシリテーターまたは参加者が、自分のテーブルで議論した目標を発表する。</li> </ul>
まとめ		
5分	まとめ	・今日の成果をどのように生かすか説明する
5分	閉会	・アンケートへの記入のお願い、閉会のあいさつ など



ワークショップの様子

### 成果③ 日本の上下水道の未来像

Japan-YWP「水×SDGs」ワーキンググループで重ねたワークショップの中で出されたスローガンをまとめています。

#### 提案①（2019年7月13日）

<p>"ACCESS"</p> <p>All, すべての人と場所に上下水道</p> <p>Contribution, 人と環境に貢献する経営</p> <p>Cooperation, 国際協力、手段、教育</p> <p>Ecosystem, 生態系を守る</p> <p>Society, 都市・街づくり</p> <p>Sustainability, 持続可能性、循環型社会</p> <p>(他の提案として、「Compassion, 思いやり」や「Citizen, 市民」が出された)</p>
--

#### 提案②（2019年8月31日；2020年1月25日）

<p>『みんなでつくるみんなの水：めぐる水、つながる水～四方よしの理念で～』（1/25）</p> <p>『あなたが求める“水との暮らし”をどんなときでも、いつまでも』（8/31）</p>	A
<p>『レジリエントの実現～一生によりそう上下水道～』（1/25）</p> <p>『災害に強い水インフラ』（8/31）</p>	B
<p>『未来へつなげる資源経営』（1/25）</p> <p>『水と自然とヒトが共に生きていく』（8/31）</p>	C
<p>『持続可能なサイクル～コンパクトシティー～』（1/25）</p> <p>『水・食・エネルギーがつながる豊かな暮らし』（8/31）</p>	D
<p>『透明で人にやさしい組織～私たちは「水」になる～』（1/25）</p> <p>『私たちがつくる魅力あふれる水業界』（8/31）</p>	E
<p>『ひらく勇気』（1/25）</p> <p>『暮らしの水を支えるために～教育・協力・イノベーション』（8/31）</p>	F

※両ワークショップに先立ち、運営側でSDGターゲットを「個人・都市・水環境・循環型社会・ガバナンス・実施の手段」（表中のA～Fに対応）の6つに分け、一覧を作成した（参照「巻末資料 成果③「水×SDGs」ターゲット一覧」）。ワークショップ当日、参加者には、テーブルごとに6つのうち一つのターゲット一覧を配布し、議論していただいた。ただし、運営側による分類の妥当性も議論の対象としており、分類時の考慮は参加者に示さずに実施した。なお、この2回のワークショップでそれぞれ用いたターゲット一覧の間には、若干の違いがある。



## 編集後記

本報告書は、Japan-YWPで「水×SDG」の標語のもとで実施した一連の勉強会、ワーキンググループとしてのワークショップ、そしてイベントにおける若手専門家の対話を踏まえたものです。執筆は、取り組みを行ってきた平野実晴を中心に、企画・運営に携わっていただいたメンバーの協力を得て行い、ワーキンググループの皆様からのフィードバックを取り入れる形をとっています。

2018年度に行った勉強会、その後はワーキンググループとして活動を開始し、国連で定められたSDGsを上下水道の視点から読み解き、参考にすることで、私たちが行動するレベルに落とし込みやすい整理ができないか、議論を重ねました。私たちが一から考えるのは難題で、活動を始めた当初、どういった成果を出せるのか明確なイメージはなく、ワークショップの企画を重ねながら、SDGsを使えるようにする方法を暗中模索しました。このワーキンググループが1年間かけて試行錯誤してきた作業の過程を振り返る中で、本報告書には結論だけではなく、ここに至る過程を再構成しながらまとめることこそが重要であるとの思いが強くなりました。

本報告書で示している「水×SDGs」メソッドがどの程度機能するか、検証を重ねる必要があります。こうした不完全な内容のものではありますが、私たちが提示した方法が、少しでもSDGsの活用、より良き水システムの構築に寄与できれば嬉しい限りです。

Japan-YWPでは初めてとなるワーキンググループの活動を、浅田安廣代表（当時）と第5期運営委員の後押しによって実現することができました。ワーキンググループの企画・運営にあたり、後藤正太郎さん、鈴木真実さん、長尾麻未さん、矢口光良さん、吉田健人さんの甚大な協力をいただきました。また、ワークショップの設計や運営、成果物のまとめにあたっては、高田一輝さんと久富稔さんにも協力をいただきました。さらに、ワーキンググループに参加をいただいた多くのJapan-YWP会員や非会員の方々の貴重なご意見のおかげで、こうして成果を出すまでに至りました。本報告書の作成と公表にあたり、第6期の栗田宗大代表にもお世話になりました。みなさまに、心から感謝申し上げます。

なお、本報告は、平野実晴が行った研究「持続可能な開発目標（SDGs）から見た日本の水行政—法学的研究手法の提案に向けて」（旭硝子財団研究助成）の成果の一部を反映しています。

企画・運営メンバー代表

平野 実晴（立命館アジア太平洋大学）

## 企画・運営に携わったメンバーからの感想・メッセージ

ワーキンググループの活動に携わる中で、どういった気づきがあったのか、あるいは、今後「水×SDGs」メソッドを実践される方へのメッセージを、メンバーに伺いました。

### 後藤 正太郎

まずは国内という身近な事例を通して、SDGsについて考える機会ができたことが良かったと考えております。特に、SDGsの水に関する目標と他の目標の関係性について考える機会があまりないため、貴重な機会になったのではないのでしょうか。

### 鈴木 真実

企画に携わり始めた当初はSDGsに対して、なんとなく希望があって、目指せば良い未来が約束されるもの、というような期待を抱いていました。しかし、学べば学ぶほどSDGsに書かれていることは特別新しいものではなく、むしろ今まで問題視されてきたにも関わらず、解決されてこなかった課題であることが分かりました。そういった課題の中には、人によっては耳が痛い、自分たちが受けている恩恵を手放さなければ達成できない課題もあると思います。SDGsを知った今、始めの頃とは違った”地に足の着いた”希望を持つことができたと思います。

また、「水×SDGs」では上下水道分野という切り口でSDGsを読み解きましたが、同じ切り口、同じ上下水道セクターの人であっても、人によって問題の見え方や感じ方が異なるというのが非常に印象的な経験でした。持続可能な社会の為に自分に何ができるか、これからも学んで行動していきたいと思っています。最後に、ワークショップに参加・協力してくださった皆様、いつも意見を決して否定せず受け止めてくださった企画メンバーの皆様、この機会を与えてくださった平野さんに、心から御礼申し上げます。

### 高田 一輝

SDGsと聞くと、「途上国支援的なバックグラウンドを持っていないと、とっつきにくいのでは？」という印象を持たれるかと思いますが、それを自分の得意分野に引き付けて考えようというのが、この取り組みの肝だと思います。自分の得意分野を軸足としてSDGsを見つめなおすことで、私自身、新しい視座を得させていただいたと思っています。完成されていると思っていた日本の上下水道も、持続可能な事業になるためには、まだまだ課題がたくさんあることに気づきました。

### 久富 稔

私は今回のプロジェクトでファシリテーターを担当させていただく中で、SDGsと真剣に対峙する機会が与えられました。自分の仕事や生活とSDGsがどこか噛み合わず、接点が結びついていない状態であることに気が付きました。まだまだ日本の自治体の中には、SDGsは発展途上国の話で日本には関係ないという価値観もまだまだ存在します。SDGsの言わんとする要旨を心でキャッチして、仕事や生活圏で展開していきたいと思っています。

また、私は電気電子情報をバックボンとする理系の技術者ですが、今回の水×SDGsでは異なるバックボンの方とディスカッションする機会が多く設けられ、新しい刺激を受けることができました。イマヌエル・カントが著書「純粹理性批判」で論じている色眼鏡を、私はやはり知らぬ間にかけていて、「日本人」「理系技術者」「電気電子情報」・・・という色眼鏡でSDGsをフィルターにかけて認識していたということでした。自分とは異なるバックボンを有する方の意見に耳を傾けて、語られる内容を消化する中で、SDGsが目指す世界観を肌で感じる事ができ、視野を広げていくことができました。

このプロジェクトで学んだ糧を活かしつつ、SDGsについてまだまだ分からないことも多いので、さらに飛躍していきたいと思っています。ありがとうございました。

### 平野 実晴（立命館アジア太平洋大学・助教）

国際法を専門とする私は、水を切り口に研究する中で、国際会議での議論だけでなく、そこで語られる理念を実現している現場のことをもっと知りたいという想いを強め、Japan-YWPに入会しました。ちょうど日本でも関心が高まっていたSDGsを使って、若手のプロフェッショナルや水に関心を持つ方々と対話をしたいと考えていたところ、浅田代表（当時）の後押しと運営委員会のご協力で、ワーキンググループの設置を可能にいただきました。

私は、「水×SDGs」の取り組みを「イニシアティブ」と呼んでいました。「プロジェクト」と呼ぶには具体的な成果のイメージを持たずにいたためです。それでも、議論や意見交換に終わらせたくはない、と考えていました。企画・運営のメンバーには、先が見えない中で、辛抱強くサポートしていただき、感謝の言葉もありません。

参加していただいた多くの方々との議論を通し、私はたくさんの学びや気づきを得ることができました。皆様にとっても、何かしらを得ることのできる取り組みであったならば、これ以上の喜びはありません。

### 長尾 麻未

SDGs関連イベントに何度か参加したことがありますが、参加者の関心は貧困、フードロス、教育、ジェンダーといったテーマが占めており、水に対して問題意識を持つ人は大変少ないという印象です。本ワーキンググループにおいて、水にフォーカスしてSDGsを考えてみると、多くのターゲットとの関連性やアウトサイド・インの視点を持つことで気づいた水の課題がいくつもありました。それら課題に向き合い、解決することで改善されるターゲットが多数あることを知ると同時に、市民の水に対する意識と現状との乖離が大きいことを深く感じました。社会的にあまり認知されていない水分野の課題は多くありますが、ワーキングを通して議論した経験及び知識が詰まった本報告が、持続可能な社会を創る一助となることを願っております。

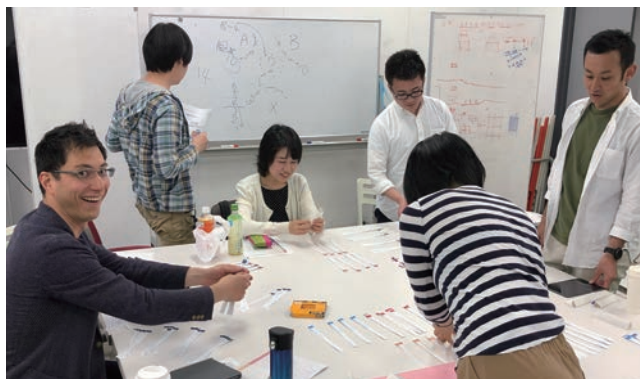
### 矢口 光良（神奈川県内広域水道企業団）

SDGsに初めて触れた方にとっては、ターゲットや目標の多さだけで嫌になってしまうかもしれません。

でも、これら目標は世界共通の言語で横串され、しかも、やり方は私たち個人、現場の人間が尊重される現場主義で、しかも柔軟に計画の変更が可能なものです。その意味で、今までのやらされ感から自律型の持続可能な事業へ転換する契機になっていくことを強く祈念しています。

### 吉田 健人

現代の社会課題がどのような要素の絡まりで構成されているか、それらを解決するためにどのような手段を講じ得るか、考える際の着想のヒントとして、あらかじめ体系的に整理されたSDGs等のフレームを活用することは非常に有効であると感じました。また、社会的に信頼性の高いSDGsの活用は、多様なバックグラウンドの方々の本活動に集まることにも寄与したと思います。



ワーキンググループの打ち合わせの様子